

国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備に伴う発掘調査報告書（1）

百足塚古墳(新田原58号墳) 新田原62・63・209号墳

遺構編

2014・1

宮崎県児湯郡・新富町教育委員会



1. 祇園原古墳群Aグループ上空から（上が北）



2. 百足塚古墳調査前 東から（平成 8 年度）

巻頭図版 2



1. 百足塚古墳 南から（平成25年3月の状況）



2. 百足塚古墳全景 北東から（平成14年度末の状況）

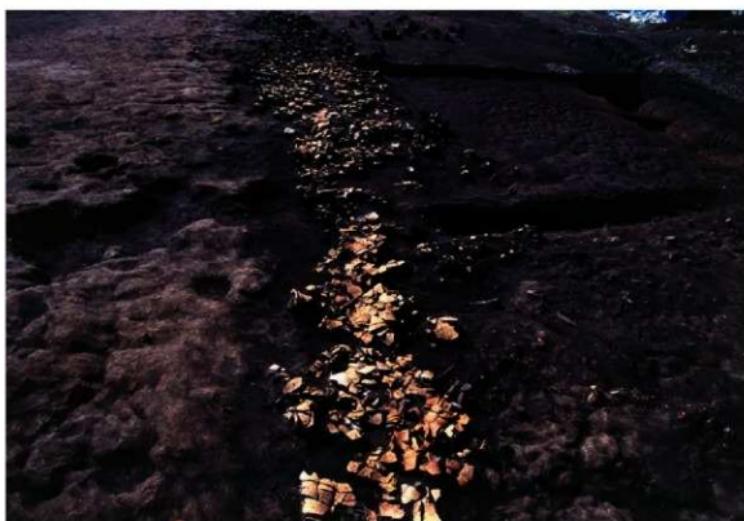


1. 百足塚古墳全景 真上から (上が北 平成15年度末の状況)

巻頭図版 4



1. III区遺物検出作業状況（南東から）



2. III区外周溝遺物出土状況（北から）



巻頭図版 6



1. III区鳥形埴輪出土
状況



2. III区人物埴輪出土
状況



3. 9T テラス様
出の円筒埴輪列
(埴頂側から撮影)



1. 土橋検出状況（北西から）



2. II・III区検出状況（南から）

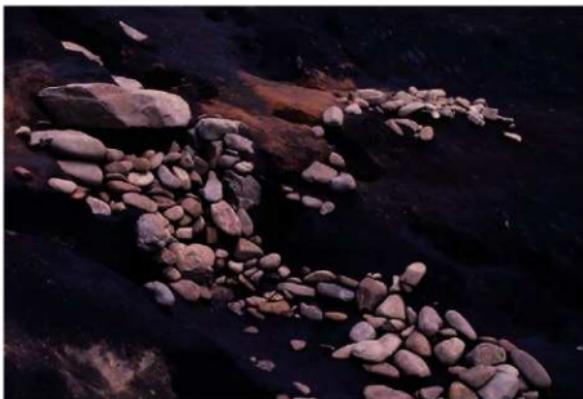
巻頭図版 8



1. IV区全景 横穴式石室検出（西から）



2. IV区全景 横穴式石室検出（真上から）



1. IV区横穴式石室
入口（北西から）



2. IV区横穴式石室
入口（南西から）



3. IV区横穴式石室
入口（正面から）

巻頭図版10



1. 62号墳周溝内
遺物出土状況



2. 62号墳周溝内
の形象埴輪出土状
況



3. 209号墳全景
(西から)

序 文

新富町は宮崎平野の北部にあって、太平洋を望む自然豊かな町です。町の南部には九州山地を源とする一つ瀬川が南から東へと蛇行しながら太平洋へと流れています。

この一つ瀬川流域には旧石器時代から連綿と続く多くの遺跡群が存在し、人々の生活の痕跡は3万年以上も前に遡ることが分かっています。とくに古墳時代には日向地方でも多くの古墳が築かれたことで知られ、新田原古墳群も江戸時代から文献に登場するなど、対岸の西都原古墳群とともに早くから多くの研究者が訪れるようになります。昭和19年に国の史跡に指定され、その後は現在にいたるまで地元の方々の手によって保護されています。

町ではこの重要な遺跡を後世にわたって保存し、生涯学習の場として活用するため、史跡整備計画を立案し、祇園原古墳群内の百足塚古墳の調査を平成9年度から開始しました。

百足塚古墳は以前から埴輪が出土する古墳として知られていましたが、今回の調査で西日本でも有数の形象埴輪群や、県内では最古となる横穴式石室など貴重な発見が相次ぎ、日向地方の古墳時代後期を代表する首長墓であることが分かりました。

これらの成果を学術研究はもとより郷土学習の素材として活用しており、整備が終了した百足塚古墳は多くの町民の方に、憩いの場として利用されることを期待しています。

最後になりましたが、調査に際してご指導を賜った関係機関や多くの有識者の方々、快くご協力いただいた地元の方々に深く感謝を申し上げます。

平成26年1月

新富町教育委員会
教育長 米良 郁子

例 言

1. 本書は国指定史跡新田原古墳群のうち、百足塚古墳（58号墳）とその周辺に展開する3基の円墳（62・63・209号墳）の整備に伴い発掘調査を行った報告書である。
 2. 発掘調査は平成9年度から16年度までの7年間行った。その後平成20年度から24年度まで墳丘復元工事を行い、それに伴う補足調査を実施している。整理作業は平成9年度以降継続して実施した。
 3. 本事業は文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金の採択・交付を受けて実施された。
 4. 本事業は、文化庁記念物課および宮崎県教育庁文化財課の指導を受けて実施した。
5. 本事業のための指導組織は以下のとおりである。調査方法・整備方針などは委員会の指導により決定した。

【新田原古墳群史跡整備検討専門委員会】

委員 小田富士雄（考古学 福岡大学名誉教授）
柳沢 一男（考古学 宮崎大学名誉教授）
森本 幸裕（修景学 京都学園大学教授）

【特別指導】

高橋 克壽（奈良文化財研究所平城宮調査部文部技官）

【宮崎県文化財課】

重山 郁子
松林 豊樹
飯田 博之
和田 理啓
東 憲章
今塩屋穀行

6. 本事業にかかわる事務・調査組織は次のとおりである。

新富町教育委員会

総 括 清 郁雄（教育長 平成9～15年度）
下村 喜秋（教育長 平成15～19年度）
米良 郁子（教育長 平成19年度～）
団師 勉（社会教育課課長 平成9～11年度）
比江島年見（社会教育課課長 平成12～17年度）
齊藤 久明（社会教育課課長 平成18年度）
馬渡 和規（生涯学習課課長 平成19年度）
後藤 博己（生涯学習課課長 平成20～22年度）
川口 弘克（生涯学習課課長 平成23年度）
河野 博敏（生涯学習課課長 平成24年度）
太田 功（生涯学習課課長 平成25年度）
高正 静夫（社会教育課課長補佐 平成9年度）

	富田 次男	(社会教育課課長補佐	平成10~13年度)
	松浦 新一	(社会教育課課長補佐	平成14~15年度)
	河野 裕	(社会教育課課長補佐	平成16~18年度)
	福原 広一	(生涯学習課課長補佐	平成18~19年度)
	金丸 雅裕	(生涯学習課課長補佐	平成20~21年度)
	有田 辰美	(生涯学習課課長補佐	平成22~23年度)
	有馬 義人	(生涯学習課課長補佐	平成24年度~)
庶務	山崎 和子	(社会教育課副主幹	平成9~11年度)
	杉田 伸子	(社会教育課副主幹	平成12年度)
	若木家えつこ	(社会教育課主幹	平成13~14年度)
	松本美奈子	(社会教育課主任主事	平成15~18年度)
	※平成19年度以降は調査担当者が庶務を行った。		
調査担当	有馬 義人	(生涯学習課課長補佐	平成9~21年度)
	樋渡将太郎	(生涯学習課係長	平成22~25年度)
調査補助	新森 美穂	(社会教育課嘱託員	平成10~12年度)
	松永 幸寿	(社会教育課嘱託員	平成13年度)
	鈴木 資子	(社会教育課嘱託員	平成15年度)
	玉谷 鮎美	(生涯学習課嘱託員	平成23年度)
参加学生	藤本貴仁	松尾茂樹 長友俊博 芝原知行 杉岡栄治 古屋美樹	
	松野圭太	河畠健一 黒木誠也 師富国博 当房祐理 宮崎恵一	
	藤原理恵	児玉健作 富田綾 落合健一 小森昌子 山本紗弥香	
	鈴木資子	塙治琢磨 森山潤一 上村広道 大園幸輝 本部裕美	
	野村碧里	新納弘子 中村有花 齊藤優子	
作業員	滝口則雄	滝口恵美子 岩下ヨシ子 野尻富子 日野君代 岩本栄	
	杉尾美千子	新恵トシ子 大原一彦 日野仁美 小守容子 吉野大	
	宝崎忠昌	倉永喜 土屋信好 河野隆子 出井クニ 宮ヶ中千穂	
	江口栄子	長友幸枝 寺原利雄 甲斐晴子 上原咲子 栗野聖子	
	坂本貞夫	土師美智子 甲斐直美 有田具子 植春子 宮本昭男	
	森晃一	守部牧子 清美貴子 満尾智美 入江智仁 古川友昭	
	田口太郎	柳田弘 長友利子 平尾ミズエ 佐々木エリ子	
	日高里子	那賀ミチ子 石川紋子 溝口敦子 高家武男 本部定臣	
	上山途枝子	黒木啓子 橋口哲男 和田啓子 東美津子 野添敏信	
	福島将太	沼口未菜 清久夫 芳野弘征 岩本勉 興梠宝 高山一	
	高山政雄	米谷房喜 稲田道人 国師満坦 宇都宮正臣	

7. 遺構実測は有馬・樋渡・小守・松尾・藤本・長友・松永・齊藤がおこなった。

8. 遺構の写真撮影は主に有馬・樋渡が行い、全景写真等については一部東憲章氏（宮崎県埋蔵文化財センター：当時）に撮影・指導して頂いた。

9. 整理作業は樋渡、杉尾、甲斐、清、溝口、吉永で行い。トレースは樋渡が行った。
10. 本書の編集は樋渡が行った。
12. 航空写真の撮影は株式会社スカイサーベイと九州航空株式会社に委託した。
13. 出土遺物その他の記録はすべて新富町教育委員会生涯学習課に保管してある。
14. 発掘調査および本書の作成にあたり下記の方々にご教示を賜った。

近藤義郎 杉井健 田中祐介 岸本圭 中村耕治 高橋克壽 古谷毅 大久保徹也
広瀬和雄 宮元香織 橋本達也 森下章司 今田治代 石野博信 林田和人
金山尚志 置田雅昭 平嶋文博 高橋美久二 池田榮史 藤丸詔八郎 岸本直文
岡村道雄 沢田むつ代 中居さやか 日野宏 村上恭通 永山修一 桑原久男
西園勝彦 小原弘巳 藤本貴仁 上原真人 望月幹夫 清喜裕二 松本岩雄
塚本敏夫 吉田和彦 大塚初重 吉留秀敏 肘岡隆夫 渡辺誠 若松良一
高島忠平 犬木努 山中章 藤沢敦 杉山晋作 辰巳和宏 藤井幸司 石川悦雄
笠瀬昭宏 津曲大祐 丹俊詞 竹中克繁 稲岡洋道 山内英樹 甲斐貴光
小橋健司 福間元 諸墨和義 井上裕一 太田博之 加部二生 志村哲 秋元陽光
賀来孝代 青山博樹 石橋充 長井正欣 江原昌俊 山田俊輔 米澤雅美 川口雅之
和田理啓 (順不同: 敬称略)

本文目次

第Ⅰ章 序論

第1節 新富町の位置と歴史的環境	1
第2節 整備事業にいたる経緯と経過	1
(1) 指定にいたる経緯	
(2) 公有化と指定地拡大	
(3) 整備に向けた動き	
(4) 調査の方法と経過	

第Ⅱ章 百足塚古墳周辺の地理と歴史的環境

第1節 古墳の位置と地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
(1) 一つ瀬川流域と小丸川流域の古墳の動向	
(2) 祇園原古墳群の概要	
第3節 祇園原古墳群に係わる記録と既往の調査	12

第Ⅲ章 調査各説

第1節 調査の概要	15
(1) 調査区の配置	
(2) 各年度の調査の概要	
(3) 土層の概況	
第2節 62・63号墳の調査区	20
(1) 調査の概要	
(2) 63号墳の調査区	
I 区 18・19・26・27・28・29・30トレンチ	
(3) 62号墳の調査区	
20・21・23・24・25トレンチ	
第3節 209号墳の調査区	31
V区	
第4節 百足塚古墳の調査区	32
(1) 墳丘周辺の調査区	
II・III区 4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17トレンチ	
(2) 墳丘の調査区	
1・2・3・4・8・9・10・12トレンチ IV区	
第5節 調査のデータからみた古墳構造の概要	80

挿図目次

図版1	新富町位置図	1
図版2	一つ瀬川流域の古墳分布図	6
図版3	紙園原古墳群と周辺遺跡	9
図版4	紙園原古墳群の古墳分布図	10
図版5	紙園原古墳群周辺の既往の調査	13
図版6	紙園原古墳群Aグループの分布図	16
図版7	トレンチ配置図	18
図版8	62・63号墳調査区配置図	22
図版9	I区平面図・断面図	23~24
図版10	18トレンチ平面図・断面図	25
図版11	19・29・30トレンチ平面図・断面図	26
図版12	26・27・28トレンチ平面図・断面図	27
図版13	20・21・23トレンチ平面図・断面図	29
図版14	24・25トレンチ平面図・断面図	31
図版15	V区平面図・断面図	33~34
図版16	II・III区全体平面図	35~36
図版17	II区南側平面図・断面図	37~38
図版18	II区北側平面図・断面図	39
図版19	III区北側平面図	40
図版20	III区南側平面図	41~42
図版21	4トレンチ平面図・断面図①・埴輪列拡大図	43~44
図版22	4トレンチ平面図・断面図②	45
図版23	5・6トレンチ平面図・断面図	47~48
図版24	8トレンチ平面図・断面図①・埴輪列拡大図	49~50
図版25	8トレンチ平面図・断面図②	51
図版26	7・17トレンチ平面図・断面図	53~54
図版27	9トレンチ平面図・断面図①・埴輪列拡大図	55~56
図版28	9トレンチ平面図・断面図②	57
図版29	10トレンチ平面図・断面図①・埴輪列拡大図	59~60
図版30	10トレンチ平面図・断面図②	61
図版31	12トレンチ平面図・断面図①	63~64
図版32	12トレンチ平面図・断面図②	65
図版33	14トレンチ平面図・断面図	66
図版34	11・13トレンチ平面図・断面図	67~68
図版35	15トレンチ平面図・断面図	69
図版36	16トレンチ平面図・断面図	70
図版37	1トレンチ平面図・断面図・埴輪列拡大図	72
図版38	2トレンチ平面図・断面図	73~74
図版39	3トレンチ平面図・断面図	75
図版40	IV区平面図・断面図	79~80
図版41	横穴式石室平面図・断面図・正面図	81~82
図版42	IV区テラス上に並べられた砾群平面図・見通し図	83

写真図版目次

- 卷頭図版 1 1. 祇園原古墳群Aグループ上空から（上が北）
2. 百足塚古墳調査前 東から（平成8年度）
- 卷頭図版 2 1. 百足塚古墳 南から（平成25年3月の状況）
2. 百足塚古墳全景 北東から（平成14年度末の状況）
- 卷頭素版 3 1. 百足塚古墳全景 真上から（上が北 平成15年度末の状況）
- 卷頭図版 4 1. Ⅲ区遺物検出作業状況（南東から）
2. Ⅲ区外周溝遺物検出状況（北から）
- 卷頭図版 5 1. Ⅲ区周溝内遺物出土状況（南西から）
2. Ⅲ区家形埴輪出土状況
3. Ⅲ区盾形埴輪出土状況
- 卷頭図版 6 1. Ⅲ区鳥形埴輪出土状況
2. Ⅲ区人物埴輪出土状況
3. 9T テラス検出の円筒埴輪列（埴頂側から撮影）
- 卷頭図版 7 1. 土橋検出状況（北西から）
2. Ⅱ・Ⅲ区完掘状況（南から）
- 卷頭図版 8 1. Ⅳ区全景 横穴式石室検出（西から）
2. Ⅳ区全景 横穴式石室検出（真上から）
- 卷頭図版 9 1. Ⅳ区横穴式石室入口（北西から）
2. Ⅳ区横穴式石室入口（南西から）
3. Ⅳ区横穴式石室入口（正面から）
- 卷頭図版10 1. 62号墳周溝内遺物出土状況
2. 62号墳周溝内の形象埴輪出土状況
3. 209号墳全景（西から）
- 写真図版 1 1. I区（東から）
2. I区（62号墳を中心）
- 写真図版 2 1. I区63号墳周溝
2. I区63号墳周溝西壁土層堆積状況
3. I区62号墳周溝
- 写真図版 3 1. II・III区全景（上空から）
2. II・III区全景（南西から）
- 写真図版 4 1. II・III区周堤完掘（南から）
2. II区石室へと至る土橋
- 写真図版 5 1. II・III区調査状況（西から）
2. II区周堤への立ち上がり
3. II区周堤から周溝へ転落した遺物出土状況
4. III区墳端付近の遺物出土状況
- 写真図版 6 1. III区遺物検出状況（南西から）
2. III区で検出した前方部隅角の墳端
- 写真図版 7 1. III区周溝内の遺物出土状況
2. III区周溝内に転落した形象埴輪（埴頂側から撮影）

3. III区周溝内に転落した形象埴輪（周堤側から撮影）
 4. III区周堤外方に転落した形象埴輪
 5. III区周堤外方に転落した櫛形埴輪
 6. III区周堤の外側を巡る外周溝
- 写真図版8 1. IV区横穴式石室検出（西から）
2. IV区横穴式石室検出（真上から）
- 写真図版9 1. IV区横穴式石室検出（真横から）
2. IV区横穴式石室（墓道から）
3. IV区横穴式石室（北西から）
4. IV区横穴式石室と天井石
5. IV区横穴式石室入口と天井石
- 写真図版10 1. IV区横穴式石室と天井石（北西から）
2. 墓道の状況
3. IV区横穴式石室入口付近の土層断面
4. IV区天井石と攪乱穴
5. IV区テラスの円筒埴輪列の状況
6. IV区墳端付近の遺物出土状況
7. IV区墳頂（前方部から撮影）
- 写真図版11 1. 1トレンチ（北西から）
2. 1トレンチテラスの土層堆積状況
- 写真図版12 1. 1トレンチテラス出土の円筒埴輪
2. 2トレンチ（西から）
3. 2トレンチ（南西から）
- 写真図版13 1. 4トレンチ（北から）
- 写真図版14 1. 4トレンチ周溝の東側壁面上土層堆積状況
2. 4トレンチ（墳丘側から撮影）
3. 4トレンチテラス上で検出した円筒埴輪列
- 写真図版15 1. 5トレンチ（左）と6トレンチ（右）（墳丘から撮影）
2. 5トレンチ（周堤から撮影）
3. 5トレンチ（周溝から撮影）
- 写真図版16 1. 6トレンチ（周溝から撮影）
2. 6トレンチ（周堤から撮影）
3. 6トレンチ周溝部分の南側土層断面
- 写真図版17 1. 7トレンチ調査状況
2. 7トレンチ北壁土層断面
3. 7トレンチ（周溝内から撮影）
4. 7トレンチ（斜め上から撮影）
5. 7トレンチ周溝内の遺物出土状況
- 写真図版18 1. 8トレンチ周堤の状況（東側から）
2. 8トレンチ周溝内遺物出土状況
3. 8トレンチ周堤への立ち上がり
- 写真図版19 1. 9トレンチ墳頂から周溝・周堤を見下ろす
- 写真図版20 1. 9トレンチ周溝および墳丘

2. 9トレンチテラス上の円筒埴輪列
3. 9トレンチテラス上の円筒埴輪列設置のための堀方
4. 9トレンチ墳頂出土の円筒埴輪
5. 9トレンチ周溝内の遺物出土状況

- 写真図版21 1. 10トレンチ墳丘と周溝
2. 10トレンチ周堤の状況（東から）
3. 10トレンチ周溝から周堤への立ち上がり
4. 10トレンチ周溝内遺物出土状況
5. 10トレンチ周溝から墳丘への立ち上がり
6. 10トレンチ北壁周溝埋土堆積状況

- 写真図版22 1. 11トレンチ（南から）
2. 13トレンチ（南から）
3. 13トレンチ東壁土層断面

- 写真図版23 1. 12トレンチ周溝と前方部斜面
2. 12トレンチ墳頂付近の遺物出土状況
3. 12トレンチ周溝内遺物出土状況
4. 12トレンチ周溝と墳端

- 写真図版24 1. 14トレンチ周溝隅角
2. 14トレンチ円筒埴輪出土状況
3. 14トレンチ周溝隅角と円筒埴輪
4. 14トレンチ（南から）

- 写真図版25 1. 15トレンチ（南西から）
2. 15トレンチ（南から）
3. 15トレンチ検出の土抗半裁
4. 15トレンチ周溝の南東隅角検出
5. 15トレンチ周堤外方の遺物出土状況

- 写真図版26 1. 16トレンチ（北西から）
2. 16トレンチ外周溝

- 写真図版27 1. 17トレンチ（西から）
2. 17トレンチクロボク屑が掘削された状況

- 写真図版28 1. 18トレンチ（東から）
2. 18トレンチ南東壁土層断面
3. 18トレンチ周溝内遺物出土状況

- 写真図版29 1. 19トレンチ（南東から）
2. 19トレンチ周溝完掘

- 写真図版30 1. 27トレンチ周溝検出
2. 27トレンチ2重目周溝土層断面
3. 27トレンチ（東から）
4. 26トレンチ（南東から）
5. 26トレンチ周溝埋土の状況
6. 26トレンチ2重目周溝の周結部分

- 写真図版31 1. 30トレンチ
2. 30トレンチ63号墳の墳端の状況

3. 29トレンチ63号墳墳丘斜面の状況

- 写真図版32 1. 28トレンチ（西から）
2. 28トレンチ63号墳墳端とテラス
3. 28トレンチ63号墳テラス

- 写真図版33 1. 20トレンチ62号墳周溝と墳丘（南東から）
2. 20トレンチ62号墳周溝内遺物出土状況
3. 20トレンチ62号墳西壁周溝土層断面

- 写真図版34 1. 21トレンチ62号墳周溝と墳丘（西から）
2. 21トレンチ62号墳周溝内遺物出土状況

- 写真図版35 1. 21トレンチ62号墳周溝
2. 24トレンチ62号墳周溝
3. 25トレンチ62号墳周溝
4. 62号墳周溝内出土形象埴輪
5. 62号墳周溝内遺物出土状況

- 写真図版36 1. 62号墳周溝内遺物出土状況①（墳丘から撮影）
2. 62号墳周溝内遺物出土状況②（墳丘から撮影拡大）

- 写真図版37 1. 209号墳北側周溝検出状況
2. 209号墳北側周溝内遺物出土状況
3. 209号墳西側周溝検出状況
4. 209号墳西側周溝内遺物出土状況
5. 209号墳（百足塚から撮影）

- 写真図版38 1. 209号墳（北から）
2. 209号墳西側周溝
3. 209号墳東側周溝

第Ⅰ章 序 論

第1節 新富町の位置と歴史的環境

新富町は宮崎県児湯郡にあり、日向灘に面する人口約18,000人の田園都市である。町域は南北約7km、東西約9kmで総面積は61km²で、主幹産業は酪農やハウスによる野菜栽培を中心とした農業となっている。南は一つ瀬川で宮崎市と接し、同じく西は西都市、北は高鍋町と接する。宮崎市の中心部までは車で約1時間と近距離にある。

町域における人類の生活痕跡は後期旧石器時代までさかのほる。東九州縦貫道建設工事にともなう発掘調査では当該期の遺跡が数多く調査されている。とくに2万4千年前の噴火によって降下した姶良丹沢火山灰（AT）下位から石器の出土が相次ぎ、本町における人類の歴史が3万年以上前に遡ることが判明した。

縄文時代の遺跡は草創期から確認されているが、早期と後期、晩期がとくに多く、前期や中期は皆無に近い。早期は大規模な集石遺構を伴うことが多く、遺跡によつては数十から百前後に及ぶこともある。出土した土器は早期前半の貝殻円筒系土器や押型文土器が中心で、早期後半の遺跡はほとんど確認されていない。後期と晩期では住居址や土器溜まりを伴い、遺跡範囲が広がるなど、長期的な生活の痕跡が伺える。ただし晩期前半の資料が欠損しているため、連続性はない。

弥生時代は前期が少なく、中期以降に遺跡数が増加する。ただしこれまで見つかっている前期の資料が、海岸の砂丘上や河岸段丘上といった調査自体があまり行われていない場所で見つかっているため、今後この地域での調査が進めば遺跡数が増加する可能性がある。中期以降は遺跡数が増加する。台地上に多いが河岸段丘上や海岸に近い砂丘上でも確認されている。

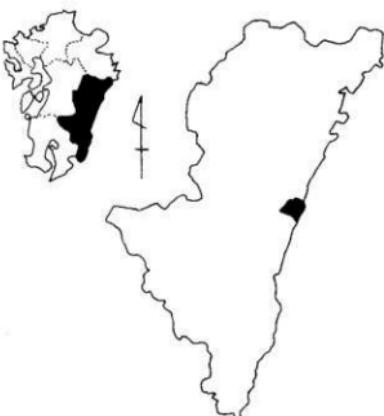
古墳時代の概要是後述するが、本町全体で300基前後の古墳が存在する。また町東部の洪積台上に位置する上原遺跡では、古墳時代中期から後期を中心に300軒以上の竖穴住居址が発見され、県内最大規模の集落跡である。

古代から中世の状況については判然としないが、中世山城が町内で少なくとも10ヶ所確認されている。

第2節 整備事業にいたる経緯と経過

（1）指定にいたる経緯

「新田原古墳群」とは国指定の史跡名称で、児湯郡新富町大字新田から西都市右松にかけて東西4.5km、南北4.5kmの台地面から沖積平野部にかけて分布する。分布の状況から4つのグループに大別でき、東から塚原古墳群、船石古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群とよんでいる。



図版1 新富町位置図

このうち今回報告する百足塚古墳は祇園原古墳群に属する。

宮崎県内の古墳群は昭和8年～19年の間に大半が国または県史跡に指定された。全国的にみて最も早い措置であるといえ、古墳の保護という観点では効果的であった。その背景となったのは昭和4年から5年にかけて各地で発生した古墳の盗掘・毀損事件にあると思われる。新田原古墳群内でも祇園原、山之坊地区内の古墳が盗掘・毀損の憂き目にあったとの記述がのこされている。そのような経緯があったためか、昭和6年に宮崎県が国指定史跡仮指定の申請を行い、昭和9年に宮崎県が新田村とともに国指定申請を行っている。その後、昭和13年に石船古墳群内における、陸軍飛行場建設計画がおこり、翌14年に仮指定の一部解除が行われ、同時に京都大学の梅原未治らが、石船塚ほか3基の古墳の調査を行っている（梅原1941）。この調査は数日間の短期間であったらしく、その後は県の瀬之口伝九郎らが調査を継続し、昭和15年8月ころ飛行場は開設された。

昭和16年以降は国指定に向けた動きが活発化している。地籍調書、地籍図、承諾書、墳丘測量図などを文部省に提出し、地籍の錯誤訂正などを行ったのち、昭和19年11月13日国指定史跡の官報告示を受けた。

（2）公有化と指定地拡大

国史跡となった翌年に、新田村が古墳の管理者として文部大臣から指定された。昭和34年に宮田村と新田村が合併し新富町となり合わせて管理団体の移管が行われたが、この間調査等は行われず、国指定史跡の管理者に義務付けられた境界標識を設置するため、昭和33年に祇園原青年会の協力で境界柱の設置を行っている。

公有化事業が初めて行われたのは昭和43年である。これは新田原古墳群が所在する春日地区内において農業基盤整備事業が計画されたことが発端となり、8,468.71m²が買収されたが、墳丘本体のみがその対象となり、周溝等は含まれていなかった。このため周囲を掘削され、形状が変化した古墳も少なくなかったようだ。公有化事業はその後も継続して行われ、昭和49年、50年、54年にわたりて計58,743.06m²が公有化されている。

昭和63年度からは国庫補助事業として古墳群の航空写真測量や実地踏査が行われ、平成元年度に保存管理計画策定書を刊行している。このなかで今後の保護管理のための施策として①指定地の公有化②指定地の拡大と公有化③環境整備④普及啓蒙があげられている。②では墳丘本体だけでなく、周溝まで含めた「面」としての指定地拡大を目標とし、そのために発掘調査を行う必要があるとしている。また、史跡の公園化についてもふれられている。

平成3年度には祇園原地区内で、は場整備が計画され、県文化課が試掘調査を実施し、翌年度に本調査を行っている。この時の調査では墳丘消滅円墳の周溝が36基検出され（飯田1996）、指定地追加用地として一部が現地保存された。そして平成4年度から5年度にかけて、指定地拡大のための試掘調査を行ったのち、平成6年度に国指定地の追加申請を行い、平成8年度に追加指定の官報公示を受けている。公有化については継続して行っており平成8・9年度には西都市側にある古墳についても、公有化が進められ、19,610.99m²が買収された。公有化面積は平成25年度現在で149,473.19m²におよんでいる。今後は古墳群の景観を保全するため指定地の拡大と公有地化を継続していく予定である。

（3）整備に向けた動き

史跡の整備は、調査→指定→公有化→整備の順で進められていくところだが、本古墳群では、古墳の保護を優先させるために、指定と公有化が先行して行われてきた。ようやく本古墳群の活用が模索されるようになったのは、指定から半世紀近くもたってからのことであった。新富町教育委員会では平成元年に保存管理策定書を刊行し、そのなかの環境整備の施策として、現墳丘と造成時の墳丘・周溝等を確認するための調査や史跡の公園化を挙げている。この施策は平成4年度に作成された「第3次新富町総合計画」に継承され、文化を創造する町づくりや地域基盤づくりの主要施策として新田原古墳群の保護、整備を推進するとしている。

この年以降整備に向けた動きは活発となり、古墳群の現状を確認するための確認調査やレーダー調査が行われ、平成5年度からは宮崎大学と合同で墳丘の測量調査が実施されるようになり、本格的な整備に向けた予備調査が進行していった。平成7年度には新田原古墳群史跡整備専門検討委員会が発足し、翌年に「新田原古墳群史跡整備基本計画書」が策定された。ここでは整備基本方針として、周辺景観を取り込んだ面的な整備を行うこととし、古墳群ごとに以下のような方向性をたてている。

- ①祇園原古墳群・・・前方後円墳同士の相互認識と周辺自然景観とが一体化した空間の形成、墳丘復原に際しての仕上の多様性、道路から見る円墳の密集と西都原古墳群との関係を表現する。
- ②山ノ坊古墳群・・・まず確認調査と墳丘の顕在化を進める。
- ③石船古墳群・・・古墳の模型展示による鳥瞰的な視線からの前方後円墳の墳形確認と石棺の存在の明確化を図る。
- ④塚原古墳群・・・平野部の水田の中に位置する古墳の修景を目指す。

そしてこれらの計画の進め方として

短期・・・公有化が進み周辺も比較的良好な景観が保たれている祇園原古墳群の公有化部分を整備する。

中期・・・祇園原古墳群の景観保全と回遊ルートを整備し、ほか3つの古墳群まで整備拡大。

長期・・・構築物の建て替えやは場整備の見直しが想定される約30年を目標に、地形・植生の復原による古代空間の形成を行う。

平成9年度からは国庫補助事業として、祇園原古墳群内の新田原58号墳（百足塚古墳）の発掘調査を開始した。

（4）調査の方法と経過

調査以前の百足塚古墳とその周辺は東側が牧草地として使用され、62・63号墳周辺は造園業者による植栽が行われていた。西側は個人住宅となりそれ以外についても畠地として利用されていた。墳丘本体はある程度の形状ととどめているものの、当初の指定が墳丘本体のみだったことから墳端は大きく削りとられて急崖となっている。また、東側では盾形周溝の形状が一部確認できるものの、西側では痕跡を確認することはできない。このため発掘調査を行う前に、指定地の拡大と公有地化を進める必要があった。そこで平成5年にこれらの基礎資料となる墳丘測量図の作成を宮崎大学考古学研究室と共同で行い、平成6年度には地中レーダー調査を実施している。国への追加指定の申請は平成6年度に行い、翌年度からは追加指定地の公有化を開始した。追加指

定の官報公示がなされたのは平成8年度で、発掘調査は平成9年度から開始した。

調査経過の詳細は第Ⅲ章第1節を参照していただきたい。調査にあたっては、新田原古墳群史跡整備専門検討委員会および県文化財課の指導のもとで行い、文化庁調査官の指導を受けることもあった。墳丘の保存を目的としたため、墳丘を構成する盛土は検出にとどめ、掘り下げを行わないこととした。ただし今回の調査対象古墳はすべて葺石を施さないことから、堆積土と盛土との区別が難しく、この場合はサブトレンチで対応した。埋葬主体についても発見しても検出のみにとどめることにした。出土遺物は埴輪列など原位置をとどめているものは、記録を行ったのち埋め戻し保存を行い。移動しているものについては必要に応じて記録を行い、すべて取り上げた。

【参考文献】

- 梅原末治 1941 「新田原古墳調査報告」「宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告」第11輯 宮崎県
飯田博之 1996 「祇園原地区遺跡」宮崎県教育委員会

第Ⅱ章 百足塚古墳周辺の地理・歴史的環境

第1節 古墳の位置と地理的環境

祇園原古墳群は、新富町の北西部の洪積台地上に位置し一部は西都市右松地区に及んでいる。

新富町は宮崎平野の北部沿岸にあって、一つ瀬川や小丸川によって生成された扇状地が隆起してできた洪積台地と一つ瀬川沿いの広低地及び、鬼付女川、日置川等河川の細長い侵食谷の低地沖積平野で構成される。洪積台地は、本町最北部にある標高120～125mの茶臼原台地、同じく80～90mの三財原台地、さらに70～80mの新田原台地へとつななり構成されている。これらの洪積台地は俗に「～原（ハル）」と呼ばれ、宮崎層群と呼ばれる砂礫や泥土を中心とした堆積層を基盤としている。台地を構成する洪積層は今から20万年前の更新世後期に堆積し、その後火山活動が活発になると阿蘇や霧島、桜島、姶良カルデラ、喜界カルデラを起源とする火山灰が降り積もり、遺跡の年代を決める重要な鍵層となった。とくに今から約24,000年前に噴火した、姶良カルデラを起源とする姶良丹沢火山灰は全国各地で存在が確認される広域テフラとして知られ、本町の台地上でも数十cm堆積している。また、約6,500年前に降灰した喜界アカホヤは縄文時代早期と前期をおおまかに区別する層として知られ、遺構検出面としても重要なテフラとなっている。このほか古墳周溝の埋土中にも火山噴出物が確認されることもあり、この地域の人々が火山の影響を繰り返し受け続けていたことを物語っている。

祇園原古墳群は標高90mの三財原台地から同70mの新田原台地に展開しており、西部から南部にかけて九州山地に源を発する一つ瀬川が蛇行しつつ東進している。百足塚古墳は、三財原台地から新田原台地へと至る傾斜面上に位置する。標高は約75mであり、北東から南東に向かって緩やかに傾斜する斜面を利用して古墳が造られている。

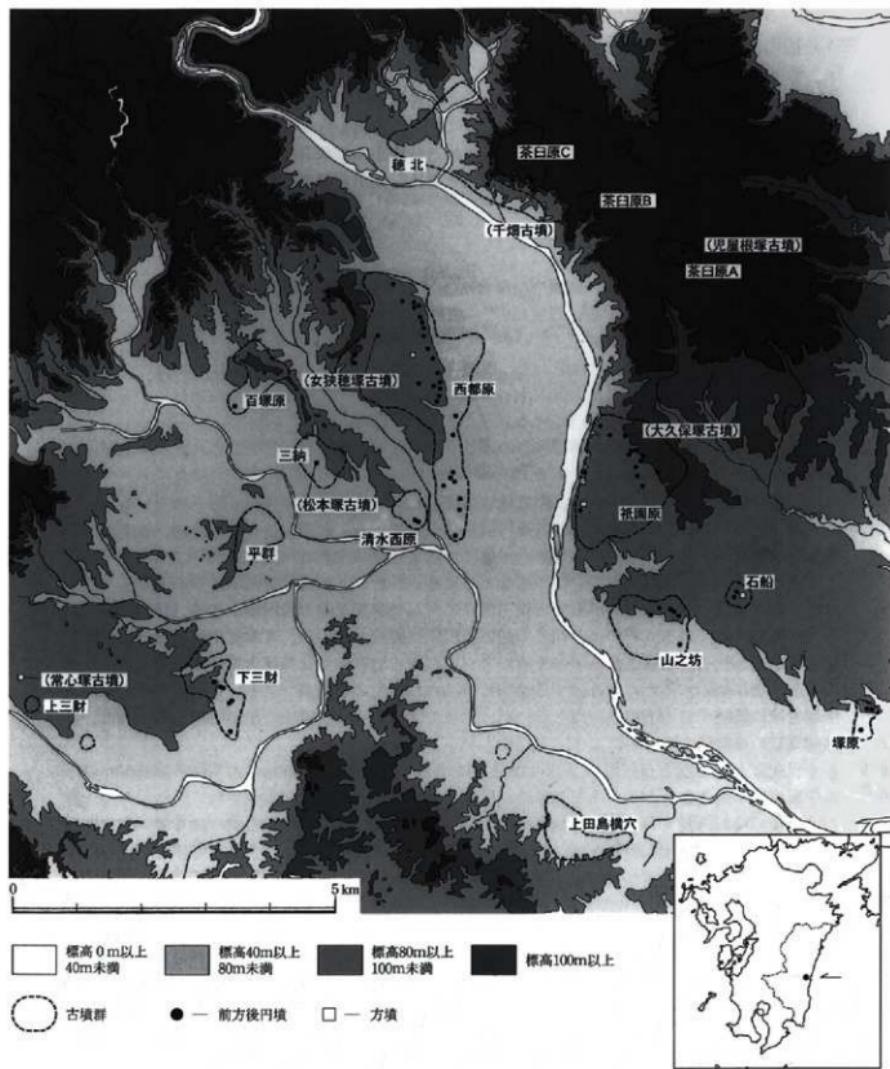
第2節 歴史的環境

百足塚古墳が所在する一つ瀬川流域と小丸川流域には、800基以上の古墳が存在し、実に県内の古墳の4割以上が集中する古墳密集地帯となっている。とくに一つ瀬川右岸に位置し本古墳から直線距離で4km離れた対岸には、全国的に有名な西都原古墳群が位置する。さらにその周辺には国府や国分寺が置かれたことから、この地域は古墳時代から古代にかけて日向地方の中心であったようだ。ここでは古墳時代については周辺の古墳群の動向や、集落との関係について整理する。

（1）一つ瀬川流域と小丸川流域の古墳の動向

先述したとおり、一つ瀬川や小丸川流域は県内最大の古墳密集地帯となっているが、早くから国や県の指定を受けた古墳が多く、調査された古墳は少ない。とくに主体部の状況が明らかな古墳となると大正年間に調査された西都原古墳群や、昭和15年に陸軍飛行場建設によって調査された石舟古墳群などごく一部に限られ、あとは盗掘によって掘り出された資料の追跡調査に頼らざるを得ない状況にあった。近年では史跡整備に伴う外表施設の調査や、墳丘測量図から畿内の大王墓との墳丘規格の比較を行い、相似形墳を抽出する作業が行われている。

当地域における古墳の導入について述べる前に、その前段階である弥生時代の墓制についてみ



図版2 一ツ瀬川流域の古墳分布図

てみると、弥生時代後期後半頃から川床遺跡や川南町の東平下遺跡で、径15~20m級の周溝墓が出現しているが、川床遺跡では周溝墓同士の切り合いで多数認められるため、大規模な墳丘ではなかったようだ（新富1986）。西都原古墳群内でも弥生時代終末期の可能性がある径10mの墳丘墓があるが、大型の墳丘墓は確認されていない。

定型化した古墳の出現については、西都原81号墳が最古例として挙げられる。この古墳は墳丘測量図の分析から纏向類型とされ、古墳時代前期でもかなり早い時期の築造が予想されていた。その後、宮崎大学が発掘調査を行い、出土土器の検討結果から前方後円墳集成（以下集成編年）の2期に下る可能性が高くなつた（久住2006）。現在のところ確実に集成編年1期まで遡る古墳はないようだ。

ところで県内には167基の前方後円墳があり⁽¹⁾、このうち測量図の分析や表採資料といった編年根拠の弱いものが多いのを承知のうえで、前期から中期初頭築造の可能性がある古墳を抽出していくと、実に半数以上を数えることができる。またその分布状況を観察すると宮崎平野部に多く、とくに当地域に集中している。ここでは前期の首長墓系団だけで13（ないし14）を認めることができ、西都原古墳群や川南古墳群では複数の首長系団が同一の台地を墓域として共有していた可能性が指摘されている（柳沢1995）。

首長系団の数では他を圧倒するが、墳丘規模でみてみると小丸川流域の持田古墳群や川南古墳群に100m級の古墳がそれぞれ1基ずつ築造されるものの、県北部の昔原神社古墳（延岡市：前方後円墳140m）や140mの3号墳を筆頭に3基の100m超を有する生目古墳群（宮崎市）に比べ見劣りしている。とくに多数の首長系団が存在する西都原古墳群ではこの時期ついに100mを超える古墳が築造されることがなかった。

中期になると首長系団の様相が一変する。西都原古墳群で複数あった首長系団が統一されるようなる形で、九州最大の女狭穂塚（前方後円墳180m）と男狭穂塚（帆立貝160m）が相次いで築造される。女狭穂塚は墳形から大阪府藤井寺市の仲津山古墳との関係が指摘され（岸本1992）、採用されている埴輪も極めて畿内色の強いものとなっている。また、これまで大規模古墳が築造されなかつた祇園原古墳群で大久保塚古墳（前方後円墳：墳長84m）が、西都市の茶臼原古墳群では児屋根塚古墳（前方後円墳：104m）が相次いで築造され、両古墳は女狭穂塚に近似する墳形と埴輪が採用されている（有馬1995）。一方で、前期に大型古墳が築造された地域の多くで、墳丘規模が著しく縮小あるいは、墳形が帆立貝型になるといった変化が認められる。

女狭穂塚と男狭穂塚築造後、西都原で前方後円墳が継続して築造されることはなかつたようだ。周辺にも継続した首長墓クラスの古墳が見あたらず、当地域での盟主墳は5世紀末の松本塚古墳（前方後円墳104m）まで待たねばならない。

この時期は南九州で顕著な地下式横穴が登場する。地下式横穴は中期初頭にえびの盆地で発生し、その後平野部に進出したという考え方が主流だったが、最近宮崎平野部でも中期前半に遡る資料が増加しており、多方面ではほぼ同時期に発生した可能性もある。当地域では前方後円墳が築造を停止した西都原古墳群内で発生する。西都原111号（円墳）に造られた西都原4号地下式横穴は玄室長が5mという規模もさることながら、甲冑や馬具など豊富な副葬品を有しており、この時期一部の首長層が埋葬施設に地下式横穴を採用していたことを物語る。西都原4号地下式は5世紀後半の築造で、現在のところ当地域での最古例となるが、中期の古墳群の発掘調査が進めばさらに古い地下式横穴が発見される可能性がある。当地域で地下式横穴が再び登場するのは6

世紀半ば以降となる。

後期になると左岸流域の祇園原古墳群で県内最大規模の首長墓系譜が築造される。古墳群の概要についてはのちに述べるが、おそらく大規模墳と中規模墳が同じ墓域に併行して築造され、互いに階層構造型の群構造を示していると思われる。一方女狭穂塚と男狭穂塚以降、前方後円墳が築造されることがなかった右岸流域の西都原で、6世紀後半になって2基の前方後円墳が場所を隔てて造られている。同様に左岸の石船古墳群、塚原古墳群、千畳古墳、三納川流域の清水西原古墳群などで前方後円墳が築造される。いずれも50~60m規模で、1~2基の築造にとどまるため、祇園原古墳群の首長墓系譜には及ばない。

当地域の前方後円墳は6世紀後半には築造を停止し、その後は大型の円墳や方墳へと変化する。円墳には西都原の鬼ノ窟古墳があり、方墳には石船古墳群の44号墳や、祇園原古墳群の138号墳、常心塚古墳（西都市）などがある。

後期は群集墳が盛行した時期でもある。当地域では横穴式石室を伴った群集墳が登場せず、木棺直葬の小規模円墳が主流となり、地下式横穴と横穴墓がこれに加わる（藤本1998）。地下式横穴は円墳の周溝内に竪坑を穿つ寄生型タイプ多い。横穴墓は6世紀の半ば以降に登場し、数基から数十基で構成されることが多い。高塚群集墳は7世紀の前半以降衰退し、地下式横穴と横穴墓は7世紀中葉まで確実に存続し後半以降衰退する。

その後、流域の首長層がどのように畿内政権を中心とした律令体制の枠組みに参画したか判然としていない。ただ、後に日向国衙や国分寺などが西都原台地に設置されるのは、前期から小首長が混在し、彼らの統括する領域の広かったことや、女狭穂塚の造営に象徴されるように、畿内政権の影響力が強かったことなどが起因しているのではないだろうか。

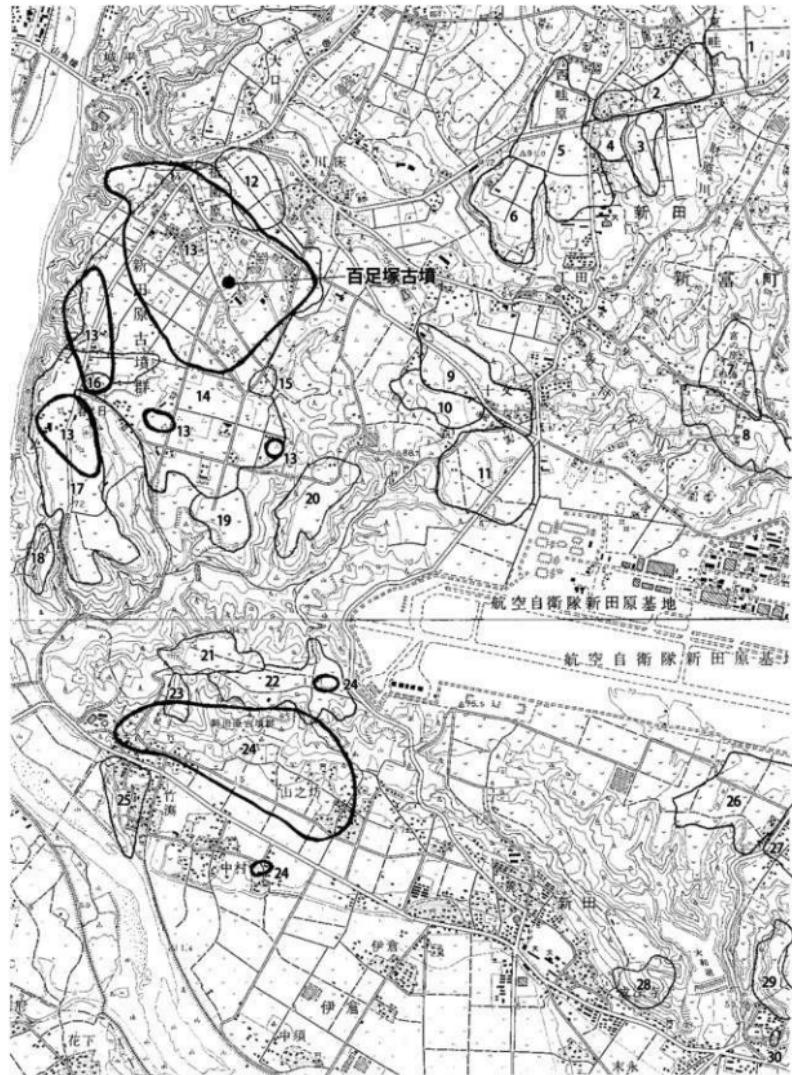
（2）祇園原古墳群の概要

祇園原古墳群は154基の古墳が現存している。内訳は前方後円墳14基、方墳1基、円墳139基となっているが、平成以降の調査で墳丘が消滅し周溝のみが残存した消滅墳が49基発見されたことから⁽²⁾、当古墳群だけで200基以上の古墳があったことになる。また、群内では地下式横穴が5基、横穴墓が2基（墓道のみが2基）見つかっている。

古墳は南北1.7km、東西1.5kmの範囲に分布している。群内には南北に貫入する2本の谷があり、古墳群はこれら谷地形によって区分された4グループに大別できる。

Aグループ

12基の前方後円墳を中心とする。前期の様相は判然としないが、先述した川床遺跡がグループの北部に位置することから、弥生時代後期後半頃から墓域として使用されていたことが伺える。北西部に位置する2基の前方後円墳（187号・195号）は前方部が低平で幅狭な特徴をもつことから前期築造の可能性がある。中期になると大久保塚古墳が造られる。採集される埴輪や墳形は先述したとおり西都原古墳群の女狭穂塚や茶臼原古墳群の児屋根塚と類似するため、近い時期の築造が予想される。それ以降継続する古墳は不明だが、65号や67号といった中規模古墳の築造時期が分かれれば連続性が明らかにできる可能性がある。後期になると前方後円墳の築造数が増加し、その多くで埴輪が樹立される。墳長60~90m級の大型墳と、墳長60m以下の中型墳が併行して築造された可能性が高く、古墳群全体としては中小の円墳を含めた階層構造型の群構造であったようだ。



- 1 東畦原第1 2 東畦原第2 3 東畦原第3 4 西畦原第1 5 西畦原第2 6 上新開 7 湯之宮
 8 須田貫 9 勘大寺 10 永牟田第2 11 新田原第2 12 川床 13 祇園原古墳群 14 紫園原
 15 茶碗山 16 瀬戸口 17 春日 18 有峰城 19 向原第1 20 尾小原 21 八幡上第2 22 七又木
 23 銀代ヶ迫 24 山之坊古墳群 25 竹淵C 26 溜水第2 27 溜水第1 28 成法寺城 29 陳ヶ迫第2
 30 宮ヶ平横穴墓群 31 竹ヶ山城 32 塚原古墳群 33 上城元遺跡

図版3 祇園原古墳群と周辺遺跡



図版4 祇園原古墳群の古墳分布図

Bグループ

唯一の前方後円墳である霧島塚古墳の詳細は不明だが、おそらく墳長90~100m規模になるだろう。周辺に展開している小円墳群は墳丘規模が10~15mで、標高72~73mの微高地に集中して分布している。出土した須恵器を検討するとMT15型式併行期を端緒として築造が始まり、MT85型式併行期をピークとしてTK217型式併行期まで存在したようだ（藤本1998）。いわゆる後期群集墳として理解される。このなかには周溝内に竪坑を穿つタイプの地下式横穴が5基検出されている。

Cグループ

前方後円墳の139号墳は前方部高が発達しており、後期古墳の様相を呈している。大型の円墳である140号墳と方墳の138号墳と続く。6世紀後半になって新出派生した首長墓系譜である可能性が高い。小円墳群はBグループと同様に後期群集墳である。

Dグループ

3基の円墳で構成されるが詳細は不明である。

集落について

古墳群内には古墳築造時期と重なる集落は確認されていない。Cグループから南に300mの地点の春日遺跡では、現在までに16基の竪穴住居址が見つかっている。出土した遺物の検討結果からTK216型式併行期からTK23型式併行期までのきわめて限定的な時期に営まれた集落であることが判明した（新富町2007）。調査面積は遺跡全体の1割程度と推定されるため、この時期に100軒以上の住居が存在していた可能性が高い。住居の規模にはある程度の格差があるものの、いわゆる豪族居館を想定するようなものはない。後期以降の集落は台地上では確認できない。古墳群から南に1km下った河岸段丘上や台地の中位面に集落が確認できる。

このように古墳の多さに比べ集落の解明は遅れている。とくに前方後円墳の被葬者である首長の居館や、埴輪を製造したとされる窯跡の発見が待たれるところである。

古墳時代以外の遺跡

本古墳群内では旧石器から古代まで幅広い時代の遺構、遺物が確認されている。海にも川にも山にも近いという立地が、生活に適していたのだろう。

旧石器時代は春日3次や瀬戸口遺跡でナイフ型石器や細石刃、細石核が出土している。いずれもA T上位層からの出土に限られているが、調査が進めば下位層からの出土も十分あり得るだろう。

縄文時代は早期前半、後期後半、晩期後半の資料が多い。ただし瀬戸口遺跡では隆起線文土器が出土しており、数少ない草創期の事例として貴重な遺跡といえる。遺跡の特徴として早期は大規模な集石や炉穴を伴い、後期や晩期は土器溜まりを伴うことが多い。

弥生時代は中期後半頃の集落が数軒から十軒程度で点在する。このような状況は古墳の本格的な築造が始まる頃まで続くようで、大規模な集落はない。ただし古墳群の北部では先述したように川床遺跡で後期後半から土坑墓群や周溝墓が築造されるようになる。

古代以降の状況は判然としない。祇園原地区では藏骨器を伴う土坑墓や柱穴が検出されているが、大規模な集落ではなかったようだ。江戸時代になると馬の生産が行われていたようで、「新田牧」と呼ばれる土壌の一部が今も残っている。

第3節 祇園原古墳群に係わる記録と既往の調査

発掘調査以前の祇園原古墳群

古墳群の記録が文献上で確認できるのは文久7年（1824年）に遡る。「佐土原領入田村境界同書」の付図の中に、「セタヲ塚」の記録があり、これは現在の霧島塚古墳（新田原111号墳）を指しているものと思われる。また、1825年に見玉実満によって著された「笠沙大略記」のには、1772～1781年に行われたという石船塚古墳（新田原45号墳）の石棺発掘の経緯を記している。

明治になると27年に宮崎県が各郡役所に指示して「古陵墓等調書」を作成する。県内の古墳位置が網羅され、新田原古墳群にある古墳もこの時期にはほぼ把握されたようだ。弥五郎塚など現在もその名が残る古墳もある。この頃から多くの研究者が視察に訪れたようで、明治32年にこの地を訪れた坪井正五郎は、祇園原に埴輪を採用した古墳が多数あることや、横穴式石室の存在などを紹介している。また、坪井が持ち帰った祇園原出土の猪形埴輪の頭部を、八木壯三郎が資料紹介している（八木1899）。

大正年間は西都原古墳群で大規模な調査が行われる。新田原古墳への視察も行われたようで、大正4年に梅原末治が新田原古墳群の紹介を行い、そこには「百足塚」の名称も見受けられる。

大正末期から昭和初期にかけては、祇園原古墳群や山之坊古墳群で盗掘・毀損が相次いで発生した。祇園原古墳群内でどの程度の被害があったかは判然としないが、山之坊古墳群内では鏡等が出土し、国の重要美術品として現在は国立歴史民俗博物館に所蔵されている。

昭和8年以降からは国指定に向けた作業が始まり、昭和19年11月13日に本指定の官報告示を受けるが、この間の出来事については第1章第2節を参照されたい。祇園原古墳群内では目立った動きはないが、戦時に高射砲建設の際に出土したといわれる環頭太刀柄頭があり、新田原52号墳出土と伝えられている（新富町2000）。

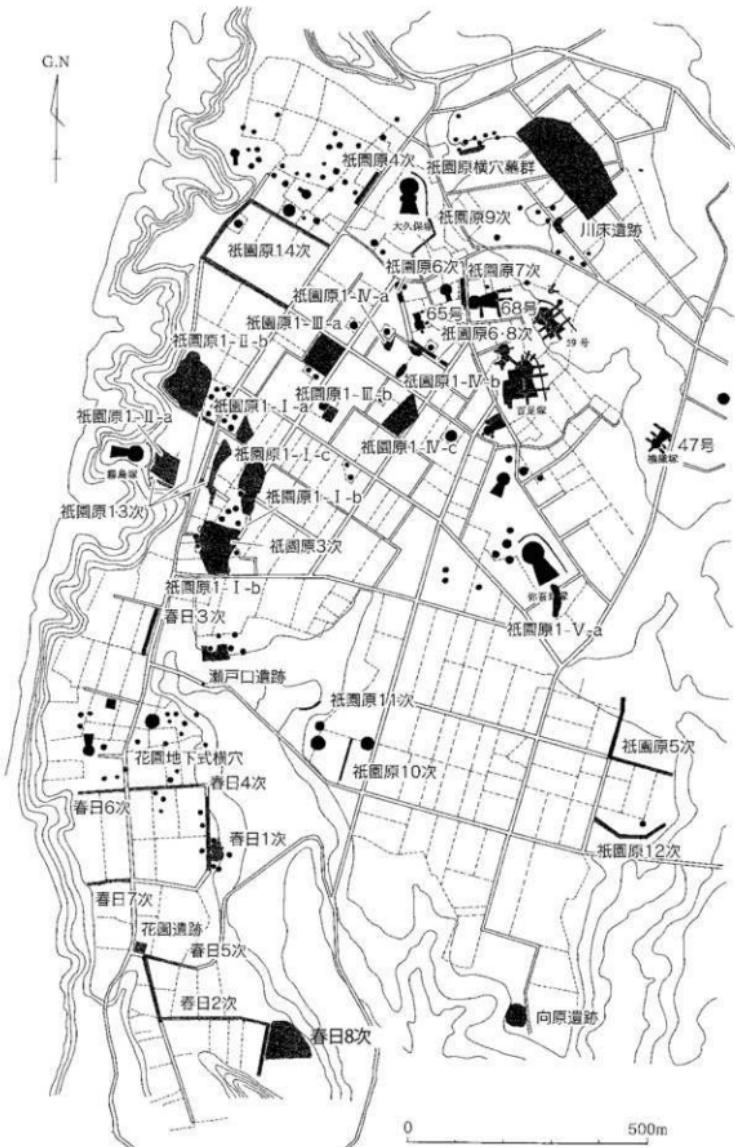
戦後も長らく調査は行われず、その間古墳を取り巻く環境は大きく変化していく。とくに指定および公有地化の対象が墳丘のみであったため、周溝等の施設が損傷を受けていった。

瀬戸口遺跡と川床遺跡の調査

昭和59年2月に行われた瀬戸口遺跡の調査は、古墳群内で行われた初めての発掘調査であった。この調査では165号墳と169号墳の周溝を確認し、須恵器片などを確認している。同年8月には古墳群の北側にあたる川床遺跡では場整備に伴う発掘調査が行われた。約20,000m²に及ぶ調査では、指定墳の周溝や新たに発見された2基の円墳のほか、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての土坑墓や周溝墓195基が発見された。また、土坑墓からは大量の鉄製品が発見されている。

農業基盤開発に伴う調査

平成4年に祇園原地区で、ほ場整備に伴う発掘調査が県教育委員会によって行われた。この調査では指定墳周溝のほか、墳丘が消滅し周溝だけが残った円墳36基が検出されている。これらの円墳群は径10～15mと均質で、微高地の一角に密集して築造されている。出土遺物からMT15型式併行期を端緒としてTK217型式頃まで築造されたことから、祇園原古墳群にある小円墳の多くが「後期群集墳」に属する可能性が高くなつた。主体部は横穴式石室に使用されるような石材の出土が全くないことから、木棺直葬と考えられるが、周溝内を掘削して地下式横穴を築造する例がある。玄室を墳丘方向に向けるものもあり、地下式横穴を第一主体部として採用していたことも考えられる。また、周溝に沿って馬を埋葬したと考えられる土坑が相次いで検出されており、当時の風習を考えるうえで興味深い。



図版5 犬鳴原古墳群周辺の既往の調査

平成10年度から平成15年度にかけて農道整備事業に伴う調査が町教育委員会によって行われた。祇園原古墳群全城が対象となり、古墳群にいくつものトレンチをいれていくような調査であった。ここでも指定墳周溝のほか、後期に比定される墳丘消滅円墳やそれに付随する馬埋葬土坑が検出され、この地域の古墳時代後期の一般的な埋葬行為だったことがわかる。また、古墳群から南に300m程離れた台地の縁辺部からは、古墳時代中期の住居を確認した。この付近では個人農地改良に伴う調査でも同時期の住居を確認しており、現状で16基を数える。出土遺物からTK216からTK23型式併行期のきわめて短期間に存在し、周辺地形から100軒以上の集落だったと考えられる。集落はこの後台地上では確認されず、一段下った台地の中位面や河岸段丘上に営まれるようになる。

新富町教育委員会による史跡内容確認を目的とした調査

町教委による史跡確認調査は平成4年度から始まった。祇園原古墳群のなかでもとくに前方後円墳が集中するAグループを中心に実施され、墳丘測量やトレンチによる周溝の範囲確認などが行われた。この調査では水神塚（56号墳）や機織塚（47号墳）からも形象埴輪片を検出している。

平成9年度からは、整備事業として百足塚古墳とその周辺円墳の調査を開始した。調査の詳細は本稿に譲るが、大規模な形象埴輪群や県内最古級の横穴式石室の検出など予想を上回る発見が相次いだ。百足塚古墳の調査は平成16年度まで継続し、その後は59号墳の調査を行っている。調査は現在も継続しているが、形象埴輪や墳丘の円筒埴輪列、須恵器を中心とした祭祀場と考えられる空間を検出している。

【註】

- (1) 「前方後円墳集成」補遺編（近藤2000）では165基となっているがその後の調査で、新たに弁指古墳（新富町2006）と、生目21号墳（宮崎市2011）が前方後円墳と判明した。
- (2) 今回報告する209号墳を含んだ数である。

【参考文献】

- 有馬義人 1995 「児屋根塚・大久保塚古墳の埴輪」『宮崎考古』14号 宮崎考古学会
岸本直文 1992 「前方後円墳築造企画の系列」『考古学研究』第39巻2号 考古学研究会
久住猛雄 2006 「憶1号墳および西都原81号墳出土土器の編年的位置と併行関係について」『南九州における出現期古墳の実証的研究』宮崎大学教育文化学部
近藤義郎 2000 「前方後円墳集成」補遺編 山川出版社
新富町教育委員会 2007 「春日遺跡8次」新富町文化財調査報告書第49集
新富町教育委員会 2000 「祇園原古墳群」3 新富町文化財調査報告書第30集
藤本貴仁 1998 「宮崎平野の群集墳～横穴墓を中心にして～」『宮崎考古』16号 宮崎考古学会
宮崎市教育委員会 2011 「史跡生日古墳群」宮崎市文化財調査報告書第85集
柳沢一男 1995 「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第14号宮崎県史研究会
八木英三郎 1899 「埴製兔鳩猪」『東京人類學雑誌』第百五十九号 東京人類學

第Ⅲ章 調査各説

第1節 調査の概要

(1) 調査区の配置

百足塚古墳とその周辺調査では、5ヵ所の調査区と30のトレンチを設定した。調査対象となつた古墳は、後世の改変により、築造当初はあったはずの周溝や段築などの施設が埋没もしくは失われており、現状では全く確認できない状況となっている。今回の調査では可能なかぎり築造当初の姿に復元することを目的として、トレンチや調査区の配置を行った。

(2) 各年度の調査の概要

平成5年度の調査

百足塚古墳の本格的な調査が始まったのは平成9年度からだが、それに先だって平成5年度には指定地拡大と公有地化を目的とした墳丘測量とトレンチ調査が行われている。

測量調査の結果、墳長76.4m、後円部径32m、見かけの墳端からの後円部高は8.8mで、前方部幅は43.6m、見かけの墳端からの前方部高は8.8mで、くびれ部幅は24m、後前高差は-0.4mである。2段築成で前方部をほぼ正南に向いている。

トレンチは周溝の確認を目的として、主軸北側とその左右に1本ずつの3本が設定された。これらのトレンチは平成9年度以降に行われた整備に伴う調査で再度精査され、それぞれ2区と4トレンチ、8トレンチに該当する。また、このときの調査で墳頂から南西方向に一部崩れた部分と川原石が集められた箇所を確認しており、横穴式石室の存在を予想している。

平成9年度以降の調査

平成9年度から始まった調査は、百足塚古墳とその周辺に展開する2基の円墳(62・63号)が対象であった。まずそれぞれの周溝の範囲を確認するための調査区(Ⅰ区)を設定し調査を行ったところ、大量の埴輪片を検出した。とくに百足塚古墳の西側の調査区(Ⅱ区・Ⅲ区)からは大王墓級を除けば西日本で最大規模となる形象埴輪群を検出したことから、調査に時間を費やすことになり、平成16年度までの8年間が調査に充てられることになった。その概要是以下のとおりである。

平成9年度

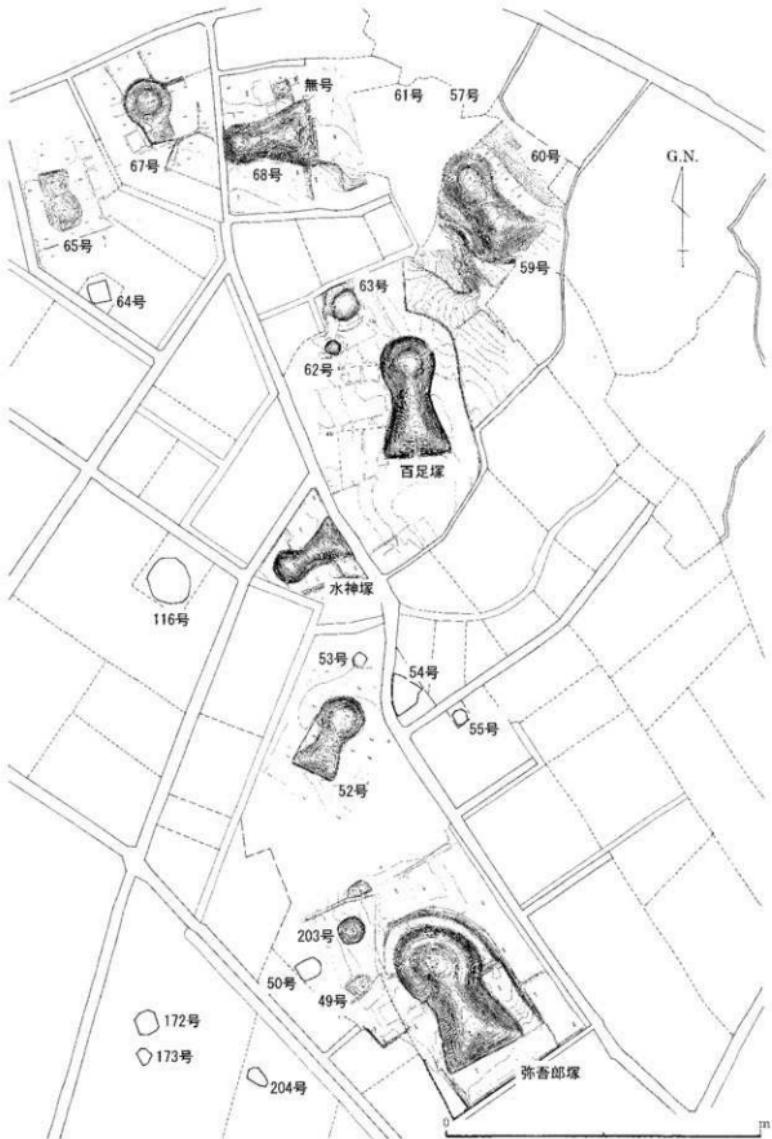
百足塚古墳の西側および、62、63号墳の位置関係を把握する狙いで調査区(Ⅰ区)を設定。62、63号墳は良好な状態で周溝が検出され、互いに切り合いがないことや、62号墳の周溝に円筒埴輪片が多数転落していることが確認された。63号墳の周溝内からは62号墳の埴輪片が検出されたことから、63号墳が後出であることが分かった。百足塚古墳の西側調査区(Ⅱ区)では周溝の立ち上がりと形象埴輪片を大量に確認した。

平成10年度

前年度の調査を継続した。百足塚古墳西側の調査区では周溝外に幅5~6mの平坦面が周溝に沿って検出。その外側には幅50cm程の溝状遺構が巡ることが判明した。形象埴輪はこの平坦面の両側に転落している状態で検出されたことから、西側外堤上に配置されていたことが判明した。

平成11年度

西側の調査区を拡張して形象埴輪の出土状況の確認を行った。また、くびれ部の西側では墳丘



図版6 祇園原古墳群Aグループの分布図

へと渡る土橋を確認した。形象埴輪はこの土橋付近から南側にかけて約30mにわたって出土している。調査区南側では墳端と思われる段差を確認。現状の墳端より1m以上拡がることが分かった。埴輪の取り上げと整理作業を本格的に開始。柵形埴輪や鳥形埴輪の一部が復元された。

平成12年度

周溝内の実測を行い、西側周溝の調査が終了した。この年から墳丘の調査に着手し4本のトレンチを設置した（1～4トレンチ）。これにより墳丘の構成が2段であることが確認された。そしてテラス上からは円筒埴輪列を検出。さらにくびれ部に設置したトレンチではテラス面で砾群を検出。埋葬施設に伴うものである可能性が高く、この付近に横穴式石室があることが予想された。整理作業では埴輪の接合・復元作業を継続して行った。

平成13年度

墳丘の確認とともに、南から東側の周溝確認を行った（5～15トレンチ）。南側では東西両側の周溝隅角を確認し、それぞれ周溝側には円筒埴輪を樹立していることが判明した。また、墳丘東側の墳頂およびテラスに樹立された円筒埴輪列も確認できた。

平成14年度

東側と北側の周溝ないし、外堤を確認するためのトレンチの設置や既存のトレンチの拡張を行い、周溝形状確認に努めた。墳丘側では墳頂やテラス、円筒埴輪列の調査を引き続き実施。西側くびれ部より北に設置した調査区（IV区）では横穴式石室の前庭部を検出。上部のテラス付近からは長さ約2mの巨石が現れたことから墳丘第一段の途中に横穴式石室の入口が開口することが予想された。

62、63号の両円墳の調査も実施。それぞれ2本ずつトレンチを設置し（18～21トレンチ）、墳端や周溝の範囲を確認。62号の周溝からは埴輪片を多數検出した。63号の東側に設置したトレンチでは、本来認識していた周溝の外側にもう1条の溝状遺構を検出。一部分だが二重目の周溝をもつ可能性が高くなった。

この年の11月から12月にかけて、これまで復元が完了した埴輪群の特別展示を町の文化会館内で実施し、あわせて記念講演を実施した。

平成15年度

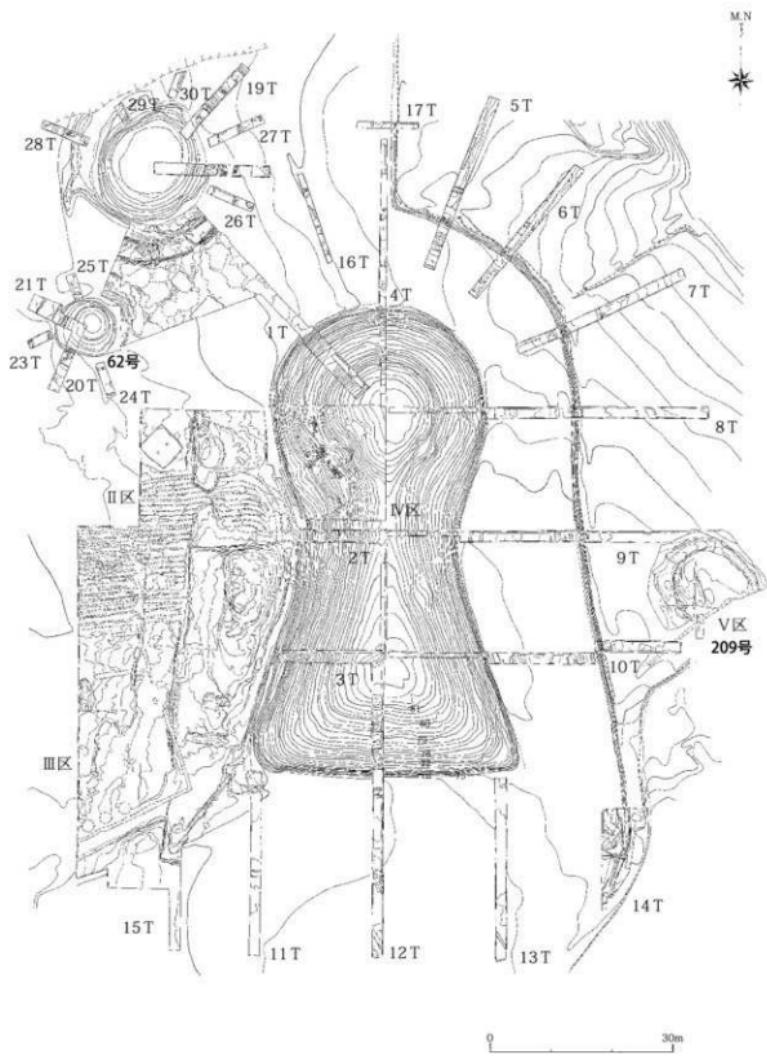
前年度の調査で調査を行ったトレンチの記録作成を行い、埋葬施設以外の調査は完了した。横穴式石室は墓道と羨門の調査を実施した。羨門部は大小の砾で閉塞され、墓道埋土の観察から、少なくとも2回の追葬行為が行われた痕跡を確認した。羨門周辺のテラス面には焼土が貼ってあり、天井石付近にはその焼土を掘削した痕跡が認められる。盗掘孔の可能性がある。

平成16年度

確認調査の最終年度にあたる。横穴式石室の墓道と閉塞部の調査を行った。墓道を構成する下層には、砾がほぼ水平に敷かれていることが判明した。閉塞部は天井石の間の約30cmの黒色土が詰まった空間を残すすべて大小の砾で閉塞されていた。石室については、閉塞部までの調査とし、図面作成を行ったのちに埋め戻しを行い、確認調査を終了した。

平成20年度以降の補足調査

この年から百足塚古墳とその周辺円墳の墳丘復元工事に着手した。復元にあたっては、表土中に含まれる埴輪片の保護を考慮して直営で行うこととし、復元に必要なデータを補充するための補足調査を一部実施した。



図版7 トレンチ配置図

表1 東九州自動車道新富・高鍋町域の基本土層

No	略 称	層 名	年 代	年 代
1		表土		
2	クロボク	黒色土		
3	K r - T h	高原スコリヤ	AD1235	本地域が分布北限に近く、低湿地のクロボク中や古墳周溝埋土などに認められる
4	クロボク			
5	K-A h	喜界アカホヤ	6.5ka	二次堆積の場合は、暗橙色の場合がある。低湿地では白い
6	M B O	黒褐色ローム		縄文時代早期中葉～末の遺物包含層
7	M L 1	暗褐色ローム		上部には縄文時代早期前葉から草創期、下部に縄文時代草創期から後期旧石器時代末の遺物を含む
8		桜島薩摩	11ka	バミスは細かく、シャーベット状のブロックになつていて。通常は明褐色で低湿地ではピンクがかることが多い。低湿地などの保存状態のよいところでみられる。
9		褐色ローム		
10	K r - K b	小林軽石を含む層	15ka	本地域では、明確な層をなしていない。小丸川以北では識別が困難になる。
				深年Ⅱ段丘堆積物
11	M B 1	暗褐色ローム		
12	M L 2			
13	A T	姶良T n	24.5ka	一次堆積層では最下部に大隅降下軽石（姶良大隅：A-Os）が見られる。
14	M B 2	暗褐色ローム		A T直下のブラックバンドと呼ばれる部分で、固くクラックを生じることが多い。MB 3では白色鉱物が少ない。中部にバミス（A-Fm, A-OT）が密な部分が見られることがある。
15	A - F m	姶良深港	26.5ka	
16	A - O T	姶良大塚	30ka	
17	M B 3	暗褐色ローム		
18	M L 3	褐色ローム		
19		赤褐色ローム		
20	K r - A w	アワオコシ	41ka	赤褐色。スコリヤ、ラビリ。固結。イワオコシより細粒。降下スコリヤを主体とする。
21	M L 4			
22	K r - I w	イワオコシ	50ka	赤褐色。アワオコシに比べ粗粒。黄褐色バミスを含む。降下軽石を主体とする。
				雷野段丘堆積物
23		明黄褐色ローム		
24		キンキラローム		黄～淡黄色の粘り気のあるローム。高温石英を含みきらきら光る。姶良岩戸（A-Iw）の風化層
25	A - I w	姶良岩戸	60ka	粗粒砂夾～径3mmの黄色軽石層。黄色いザラメのように見える。高温石英が非常に多い。ATより粗粒
				阿蘇富段丘堆積物
26	A s o - 4	阿蘇4	86-90ka	本来は阿蘇4火碎流噴出の際の灰白色ガラス質降下火山灰もしくは火碎流堆積物であるが、風化が激しい場合が多い。その場合、褐色・橙色・ピンク等に変色。褐色角閃石を特徴的に含む。

* 本表は宮崎県埋蔵文化財センター発行の「東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ」2004を参考にした。

* 略称のMLはローム層、MBは黒色土帯を意味する

平成20年度は百足塚古墳の墳丘復元工事を行った。このとき周辺地形を確認のための調査を東側で行ったところ、円墳の周溝を検出した。円墳はすでに墳丘を失っており、209号墳と呼称することにした。209号墳の調査は平成21年度に行い、周溝の8割を検出し須恵器を中心とした多量の遺物を検出した。須恵器は60個体以上に及び、ほとんどが百足塚古墳に向いた周溝西側に転落した状態で検出された。

平成22年度から23年度にかけては、209号墳のほか62号墳と63号墳の補足調査を実施した。とくに62号墳では周溝内の比較的浅い位置に埴輪が検出されることから、出土状況の図化を全面的に行い、遺物の取り上げを終えた後に復元工事を行った。

63号墳では、以前の調査で確認された二重周溝の確認を行い、復元工事に取りかかった。

(3) 土層の概況

町内の洪積台地上における基本土層は表1のとおりで、百足塚古墳周辺でも同じような状況を示している。古墳西側では宅地や造園、畑地による改変が多く、クロボクや喜界アカホヤの残存状態が悪いが、東側では地山の残存状態が良好で、クロボク層が遺構検出面となった箇所も多い。

古墳は喜界アカホヤ上層のクロボク層を構築面とし、周溝はこの層から掘り込んで形成されたと考えられる。調査時の土層断面図には、周溝の底面がどの層に該当するか示されていない場合があるが、墳丘を構成する盛土に始良Tnブロックが混じることから、百足塚古墳や63号墳のもっとも深い箇所は始良Tnにまで及んでいた可能性が高い。もっとも浅い部分では喜界アカホヤ下層の黒褐色ロームや暗褐色ローム層を底面としている。

周溝の底面付近には、地山ブロックが多く混じる固くしまった層が見受けられる。これは周溝を掘削したあとに、凹凸部分を埋めて被覆調整したもので、東側周溝から周堤への立ち上がり部分でもこのような土が認められる。周溝埋土の中心となるのは黒色もしくは黒褐色系の土壤で、埴輪片もこのなかに含まれる。上層には13世紀代に降灰したと考えられている高原スコリアを含む土壤が確認される場合があり、周溝の埋設が長期間に及んでいた証拠といえる。

墳丘を構成する盛土は黒色系の土壤で、クロボク層や堆積土も似たような特徴をもつことから見極めが難しい。盛土には地山ブロックなどが混入する場合が多いが、墳丘の二次堆積土中にも含まれる。平面での識別が困難な場合はサブトレンチを設置して分層を行っている。

第2節 62・63号墳の調査区

(1) 調査の概要

百足塚古墳の北西側に近接して62号墳と63号墳の2基の円墳があり、62号墳からは百足塚古墳と同じ円筒埴輪が表採できる。2基とも墳丘の周囲は全面にわたって掘削され急崖となっている。

調査は平成9年度から開始した。まず百足塚古墳の周溝との位置関係を確認するために調査区を設置（I区）したが、かつて造園業者の植栽地であったことから、あちこちで重機による搅乱が認められた。それでも62号墳と63号墳の周溝は良好な状態で検出された。百足塚古墳の周溝はI区内では検出されず、既に削平された可能性が高い。

I区は平成10年度に遺物の取り上げや実測図の作成を行い、終了後は遺構保存のため埋め戻しを行った。この後は百足塚古墳の調査を優先したため、2基の調査は平成14年度から再開し、それぞれ63号墳に18・19トレンチ、62号墳に20・21トレンチを設置した。調査は平成15年度まで実

施し、調査終了後埋め戻しを行った。

この後は百足塚古墳の石室の調査や、整備のための実施計画書や設計書の作成を行い、両墳とも築造された当初の姿に戻すための復元工事を実施することになった。そのためさらなる詳細なデータを得るために調査を平成22年度から実施した。調査は62号墳が平成22年度に、63号墳は平成23年度に終了し、その後墳丘復元工事を行った。

整備に伴う補足調査では遺構の保護を最優先とし、墳丘や周溝は検出のみにとどめ、断ち割りは極力行わず、周溝内の堆積土の掘り下げもサブトレレンチでの確認とした。また、62号墳は周溝内で出土する埴輪を保護するために、墳丘復元工事を行う前に出土位置の記録を行ったのち、取り上げを行った。

(2) 63号墳の調査区

I区

百足塚古墳と62・63号墳の周溝の位置関係を把握するために設置した調査区である。先述したとおり、百足塚古墳の周溝は削平され検出されていない。古墳時代の遺構とは別に弥生時代の堅穴状遺構2を検出している。

62号墳

周溝の立ち上がりの一部が重機による掘削を受けていたが、幅3m、検出面からの深さ40cmで、墳丘に樹立されていたと思われる埴輪片が大量に転落している。大半は円筒埴輪だが、盾形埴輪や須恵器片も含まれている。

63号墳

周溝は幅3.8m、深さは1m以上に及ぶ。須恵器片とともに少量の埴輪片が出土したが、62号墳のものと接合できたことから、63号墳には埴輪の樹立がなかった可能性が高い。また、地山を削り残してつくった土橋の存在を確認している。土橋は幅2.5m、現況では周溝底面より50cm程高くなっている。この上にさらに盛土を施していたと考えられるが、既に流出しており、完成段階の状況は判然としない。

両墳とも周溝底面の凹凸を、地山ブロックが混じった黒土で被覆調整している。

18トレンチ

63号墳東側に設定した。周溝や墳丘の状態を確認することを目的とした。

墳丘

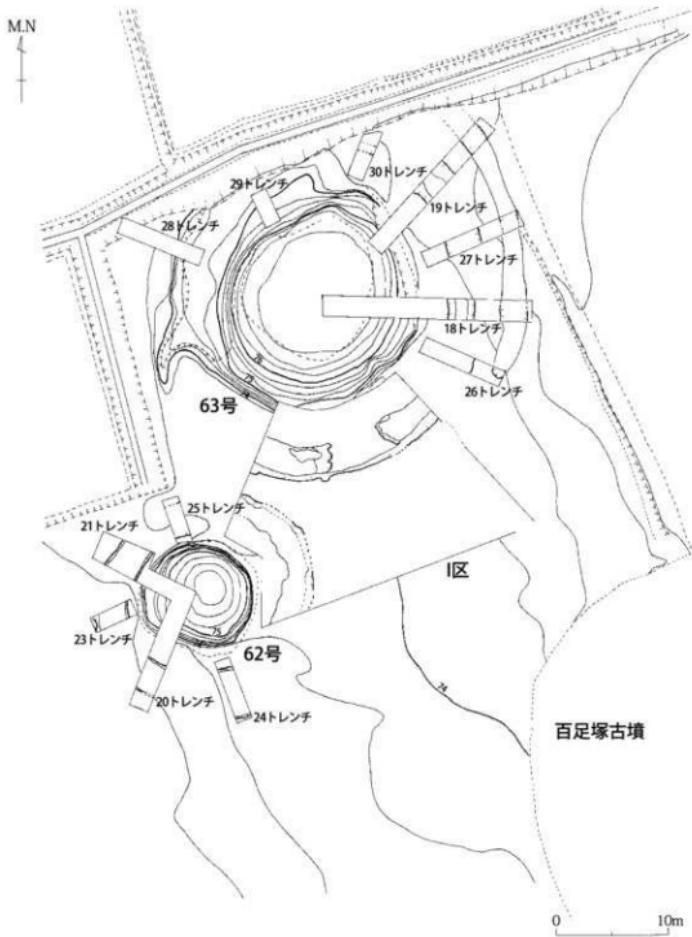
墳丘の端部は大きく掘削され急崖となっており、本来あったはずのテラスも確認できない。墳頂は比較的良好な状態で遺存しており、平坦面は広い。

周溝

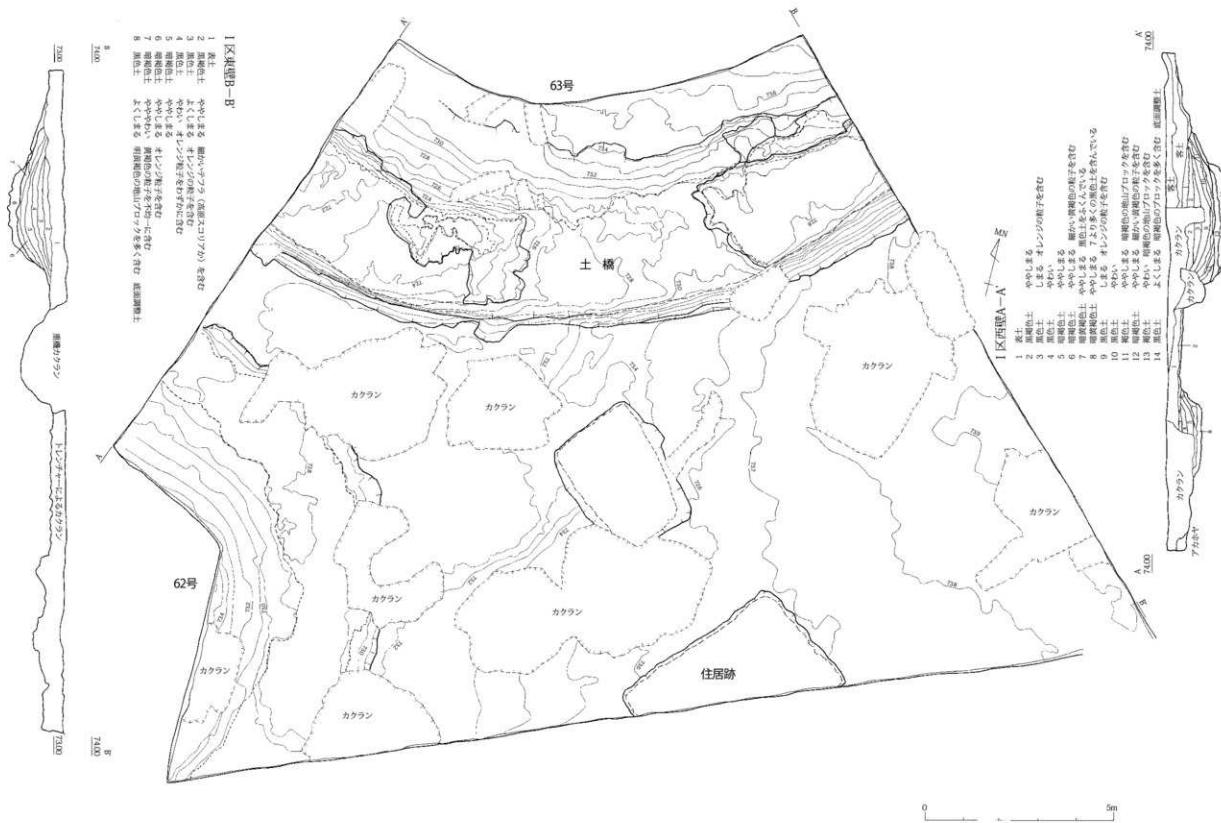
検出面での幅は2.2~2.3mと後述する19トレンチに比べて1m程狭いが、これは18トレンチの墳端部がより深く掘削されている影響である。検出面の深さは1.1mを測る。底面は地山ブロック混じりの土で被覆調整が施されている。周溝から2.4m離れて溝状遺構を検出した。検出面での幅は2.4m、深さは15cmを測る。63号墳の二重目の周溝の可能性が高い。

出土遺物

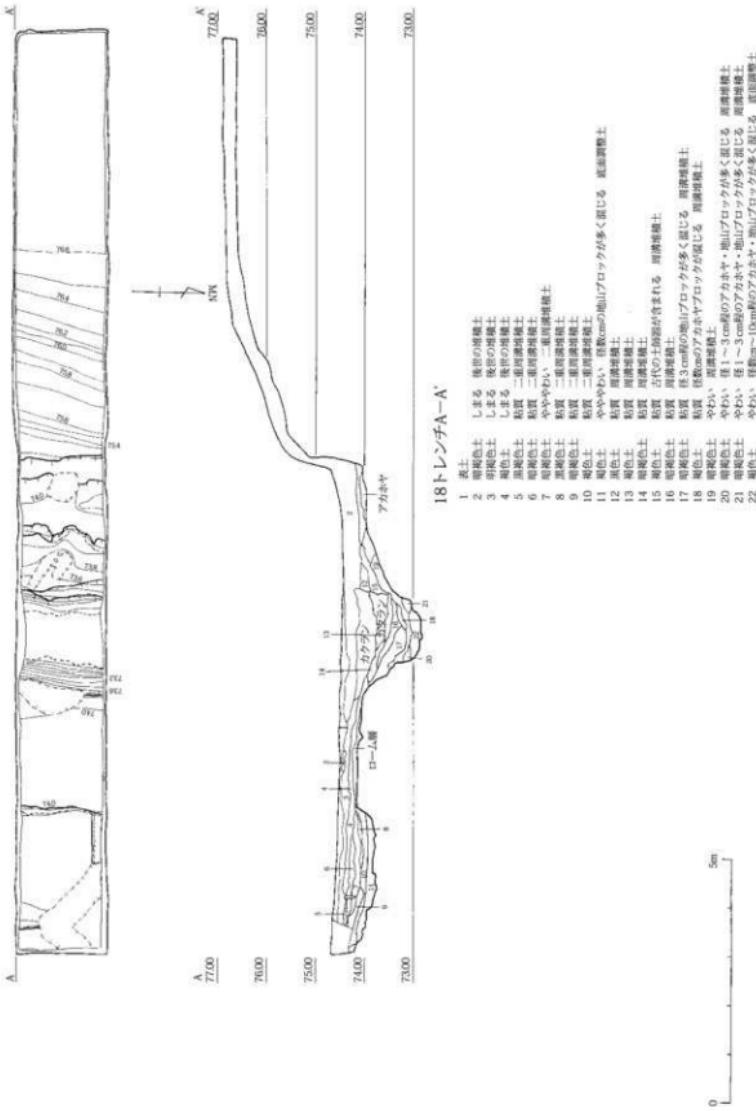
墳頂や周溝、溝状遺構から埴輪片や土師器、須恵器が出土した。百足塚古墳や62号墳からの混



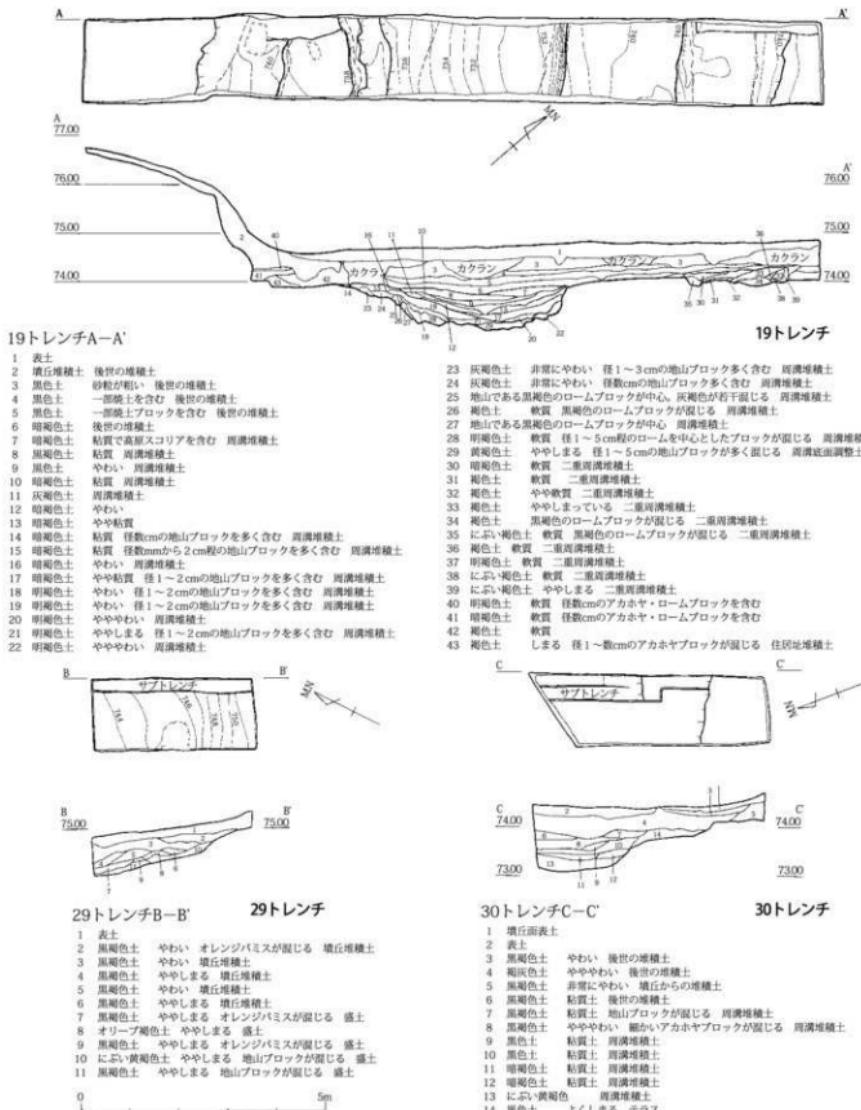
図版8 62・63号墳調査区配置図



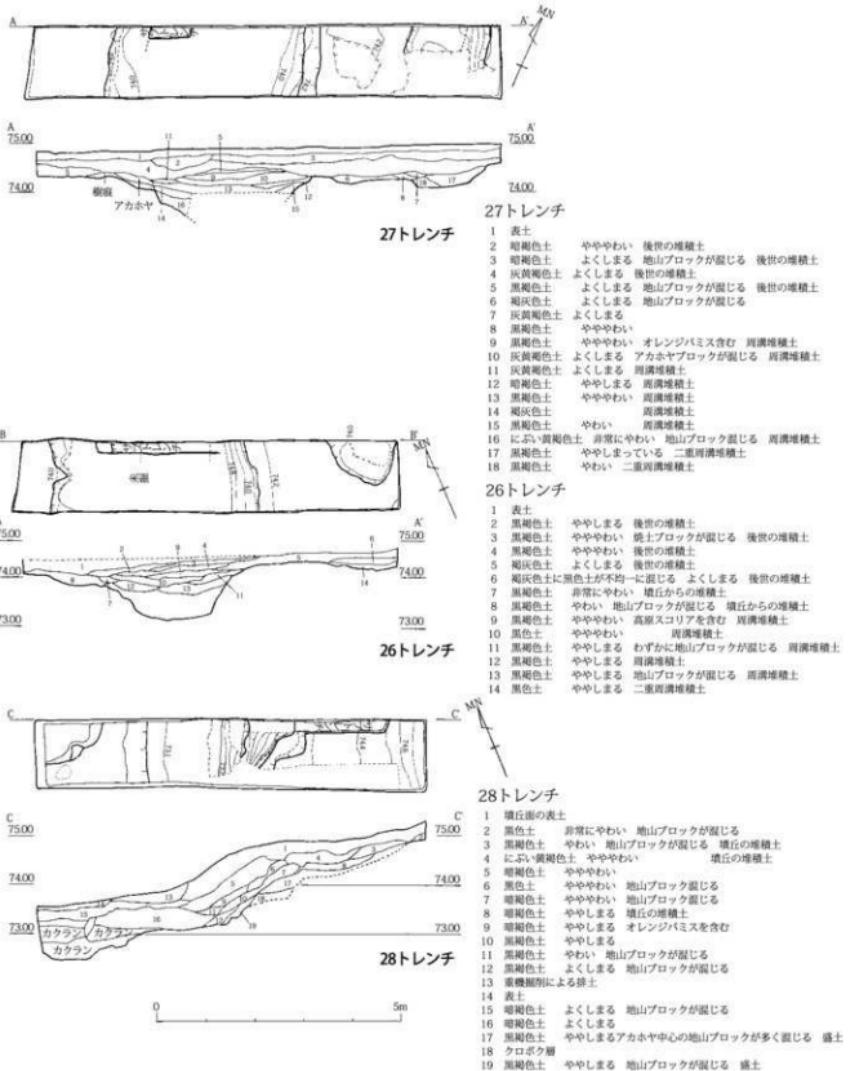
図版9 I区平面図・断面図



図版10 18トレンチ平面図・断面図



図版11 19・29・30トレンチ平面図・断面図



図版12 26・27・28トレンチ平面図・断面図

入と考えているが、墳頂からもわずかではあるが埴輪片が出土している。墳頂に少量の埴輪が樹立していた可能性が全くないとはいえないが、いずれも小片で数も少なすぎる。鳥などの小動物の運搬や、墳丘築造の際に百足塚古墳や62号から混入した可能性が考えられる。

19トレンチ

周溝や墳端の状態を確認するために設定した。

18トレンチと同様に墳端が掘削されている。検出面での周溝幅は3.4mで深さは0.8mを測る。

わずかにテラスと思われる平坦面が残存するが、そこから墳丘への立ち上がりは大きく掘削され判然としない。周溝から2.4m離れて溝状構造を検出。二重目の周溝だろう。検出面での幅は2~2.2mで深さは最深部で25cmである。

見かけの墳端に近い位置に弥生時代の住居址を検出した。中期後半頃と考えられる。

26トレンチ

二重目の周溝を確認するために設定した。

遺構の保護を優先のために周溝部分は立ち上がりの確認にとどめ、堆積土の掘り下げはサブトレンチのみで行った。検出面での周溝幅は3.2mで、二重周溝までの間隔は約2m。二重周溝は重機による掘削を受けているが、残存部分の幅は1.6~1.8mで、深さは50cmを測る。

墳丘側には本来テラスが存在したはずであるが、墳丘は大きく掘削されており、位置を確認することはできない。

27トレンチ

26トレンチと同様に二重目の周溝の確認を目的として設定した。

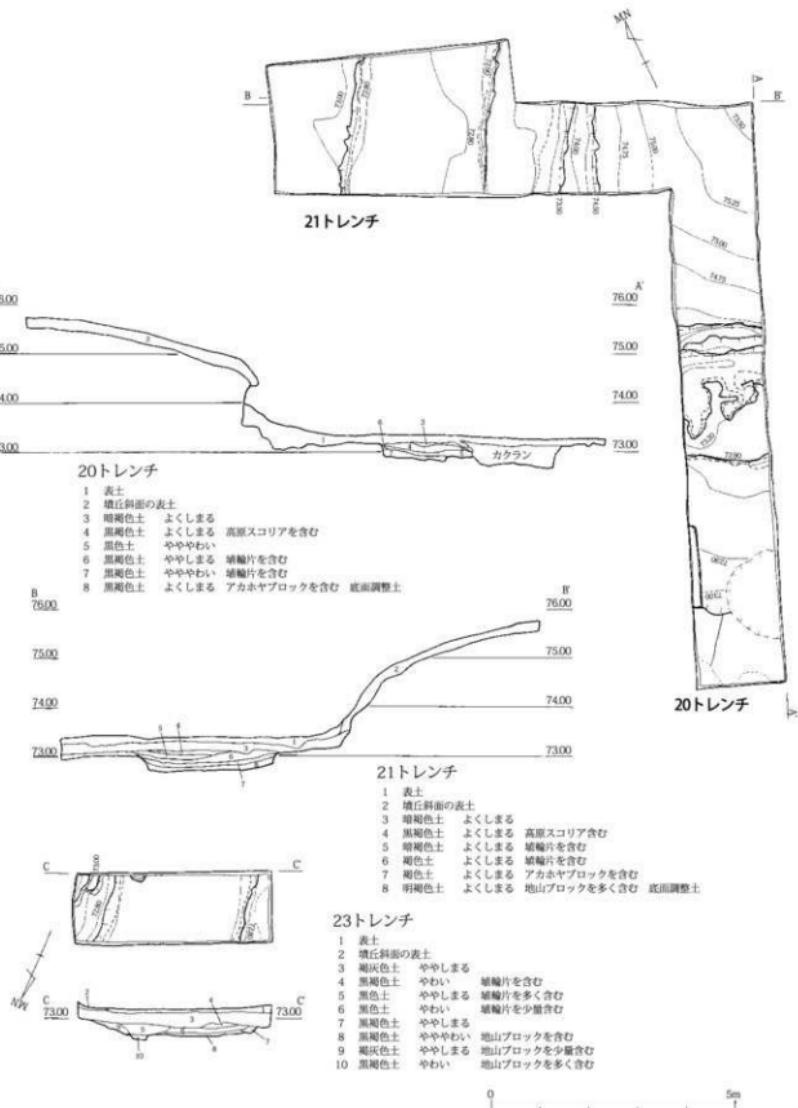
一重目の周溝は立ち上がりの確認を主としたため、堆積土の掘り下げはサブトレンチのみで行った。検出面での周溝幅は2.8mで、深さは1.08mを測る。二重目の周溝までの間隔は1.7mで、このトレンチの半ばで収束していることから、二重目の周溝は全周することなく百足塚古墳の外周溝の手前で収束していた可能性が高い。

28トレンチ

西側の状況とテラスの状況を把握するために設定した。一部が平成5年度に調査したトレンチと重なっている。

重機による掘削を複数回受けしており、墳丘斜面に残った土も掘削により生じた土砂を一部積み上げている。現状で確認できる墳端部分は掘削を受けた痕跡が無いことから、これが実際の墳端と考えてよいだろう。周溝外側の立ち上がりは掘削され確認できない。墳端から1.1m立ち上がったところで平坦面が確認できる。この部分がテラスと考えられ幅は1.1m程である。テラスから墳頂へと至る斜面は掘削され、急傾斜となっている。

ところでこの周辺は東から西へと傾斜しており、本トレンチと対面にある19トレンチとで喜界アカホヤの検出面の高さを比較した場合、本トレンチが1.7m低い位置で検出されている。ところが墳端の高さはほとんど差がなく、墳頂平坦面もほぼフラットなつくりになっている。テラスの高さは東側の状況が判然としないため推測でしかないが、高低差はほとんどなかった可能性が高



図版13 20・21・23トレンチ平面図・断面図

い。

29トレンチ

北側の状況を確認するために設定した。この部分は用水路を設置するために古墳が削られており、テラスより下部の斜面は既に消滅していた。テラスと考えられる部分は、傾斜が緩くなるものの明確な平坦面ではない。流出した可能性が高い。

30トレンチ

北東側の状況を確認するために設定した。遺構の保護を優先したため、周溝堆積土の掘り下げはサブトレンチのみで行った。墳端を確認することができたが、周溝外側の立ち上がりは用水路設置に伴う掘削で既に消滅している。

周溝の堆積土と墳丘を構成する喜界アカホヤ層との間には、黒色土を固く締めた層が1.2mの幅ではほぼ同一レベルで堆積しており、この部分がテラスと考えられる。

(3) 62号墳の調査区

I区

63号墳で説明しているため割愛する。

20・21・23~25トレンチ

墳丘の規模や周溝の形状を把握するために5本のトレンチを設定した。

墳丘

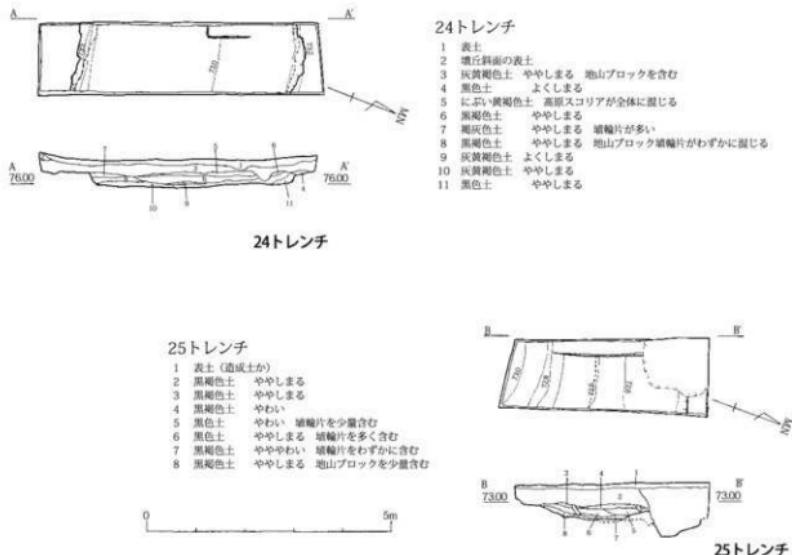
20・21トレンチでは墳丘頂上まで表土を掘削したが、本来あったはずの埴輪の樹立痕跡を確認することはできなかった。埴輪列が基底部から失われるほどの土の流出があったようである。埋葬主体の堀方も確認できなかった。

周溝

すべてのトレンチで周溝を検出した。検出面は喜界アカホヤ面で、幅は2.8~3m、深さは25~30cmを測る。周溝底面は喜界アカホヤ下の黒褐色ロームや暗褐色ロームで、凹凸部分を地山ブロック混じりの黒色土で被覆して調整している。墳丘の周囲はすべて削られて急崖となっており、段築や墳丘斜面の状況も判然としないが、もともと段築は存在しなかった可能性が高い。墳丘斜面角度も推測でしかないが、30~35度程度だったと思われる。

出土遺物

トレンチ内には円筒埴輪2~4本分の破片が散乱している。調査後の墳丘復元工事の際に、周溝内に転落した埴輪はすべて平面実測を行い、その後取りあげたが、周溝の全面にわたって埴輪片が出土し、須恵器片もわずかに混じる。埴輪の大半は円筒埴輪で、朝顔形と盾形埴輪がわずかに含まれる。おそらく墳頂にはかなりの密度で並べられ、その後転落したようである。円筒埴輪は百足塚古墳のものと同規格品であるが、須恵質で焼歪みしているものが多い。須恵器はTK43~209型式併行期で、追葬行為や埋葬後に行われた墓前祭祀に伴う可能性が高い。



図版14 24・25トレンチ平面図・断面図

第3節 209号墳の調査区

V区

平成17年度の調査で周溝の一部が検出されていたが、百足塚古墳の周辺整備を行うにあたって古墳の規模・形状を把握する必要があった。調査前の段階ではまったく古墳の存在を認識できない状況である。このため仮の中心点を設定し、そこから放射状にトレンチを設定した。検出面は喜界アカホヤ面を想定していたが、東ないし南では上層のクロボク層の残存が良好だった。クロボク層は周溝の堆積土と似ており、平面での見極めが困難な場合はサブトレンチを設定し、断面で判断した。土層断面実測後は各トレンチ間の表土を除去して面的な検出を行った(V区)。また、百足塚古墳側にある西側を中心に、周溝内に大量の須恵器が出土した。209号墳は整備の際に周溝をすべて検出し、土を覆つて整備面をつくる方法が検討されていたため、実測後に遺物をすべて取り上げた。

遺構

全面検出を目指したが、調査区の制約上検出できたのは8割ほどである。南側は里道および畜舎の敷地内となるため全面検出を断念し、里道部分はトレンチで対応した。

直径は12.5m、検出面での周溝幅は1.2~1.5mを測る。壙丘を構成する喜界アカホヤ層と一部クロボク層およびその上面には、わずかに盛土と考えられるアカホヤブロック混じりの黒色土が残存していた箇所を確認したが、盛土部分の大半は削平されていたために、高さや段築があったかどうかは不明である。埋葬主体も不明だが、横穴式石室や地下式横穴の痕跡が認められないことから、竪穴系の埋葬主体だった可能性が高い。

周溝の底面はほぼ全面が喜界アカホヤのブロックが混じった黒色土で均されている。遺構保護のため底面調整土は掘削しない方向で進め、堀方の底面はサブトレーンで確認した。底面調整土は深くても15cm程度である。

出土遺物

周溝内からは大量の遺物が出土した。とくに百足塚古墳に面した西側に集中して出土しており、設置にさいして百足塚古墳を意識した可能性がある。ほとんどが細かく破碎しており、かなり離れた破片同士の接合があることから人為的に投げ込まれた可能性が高い。遺物の大半は須恵器で壊身、壺蓋、有蓋長脚高壺、無蓋長脚高壺、甕、無頸壺、ハソウ、脚台付壺などが出土している。土師器は摸倣片がわずかに出土しているだけで、埴輪は全く出土していない。遺物は床面直上ではなく、5~10cm程浮いた状態で見つかっている。このことから古墳築造後しばらくして、転落した（もしくは投げ込まれた）と考えられる。

第3節 百足塚古墳の調査区

(1) 墳丘周辺の調査区

本古墳では、周溝、周堤などの検出を先行して行った。とくに古墳西側では本来巡っていたはずの周溝や陪塚と考えられる62、63号墳との位置関係が判然としなかったため、I区、II区、III区と面的調査を行い、その把握につとめた。その後は墳丘本体の調査と並行して東側や南側での調査を行った。

I区

第2節で報告したとおりで、この調査区からは百足塚古墳に付属する遺構は検出されなかった。

II区・III区

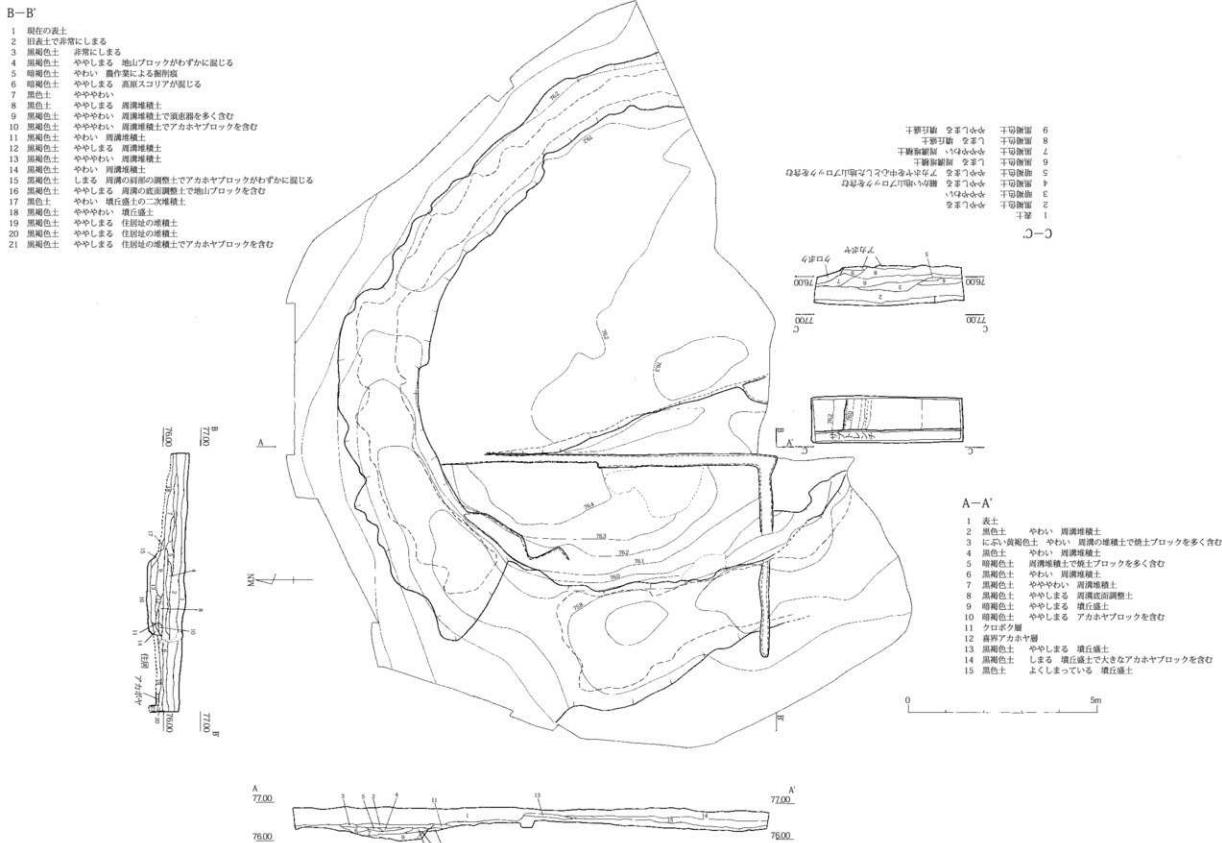
墳丘西側の墳端、周溝、周堤の検出を目的として設定した調査区である。まずII区では北側の180mを調査対象とし、その後III区の1,050mも同時並行で調査を行ったところ、II区では、周溝内から鹿形埴輪や人物埴輪の男性器を検出し、III区でも周溝内や周堤外側で大量の形象埴輪片を検出したことから、大規模な形象埴輪群の存在が明らかとなった。このため、形象埴輪群の全面検出を目指し、II区を南側に拡張していき、結果的に西側の墳端、周溝、周堤を全面的に検出することができた。

墳端

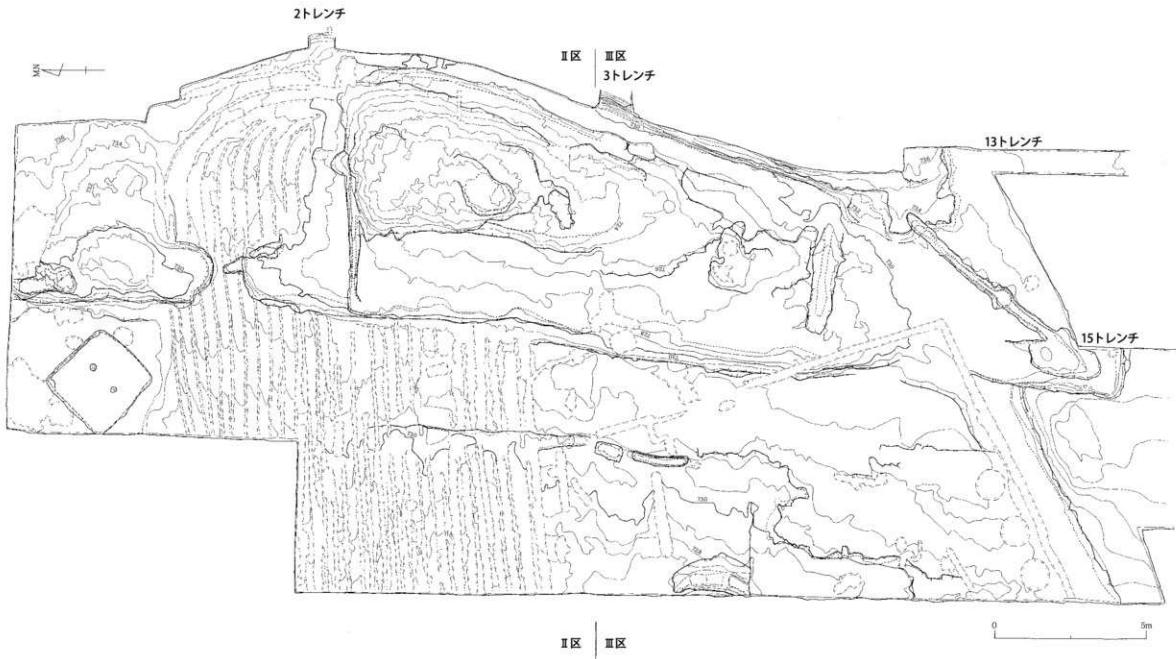
本古墳の周囲はすべて攪乱を受けている。調査前の見かけの墳端から1.5m~2m外側にわずかな段差が認められたため、これが本来の墳端であった可能性が高い。くびれ部は緩やかなカーブを描く形状でとなっているため、後円部と前方部との境界が明瞭ではない。前方部隅角も攪乱が激しく形状が判然としない。盛土はすべて失われ、地山部分がかろうじて残っているような状態であったが、見かけの墳端からは3m広がる位置になると思われる。

周溝

掘方はくびれ部付近、後述する土橋の南側が非常に深くなっている。全体的には荒堀の土抗の連続のような印象である。掘方最終面の直上は遺物を含まず、地山ブロックを含んだ固い黒色系の土で覆われているため、掘方終了後に調整を行い、完了時には均一で整った形であったと予想される。これらの土の上面には黒色系の埋土が堆積しており、高原スコリアを含む土層も確認で



図版15 V区平面図・断面図



図版16 II・III区全体平面図

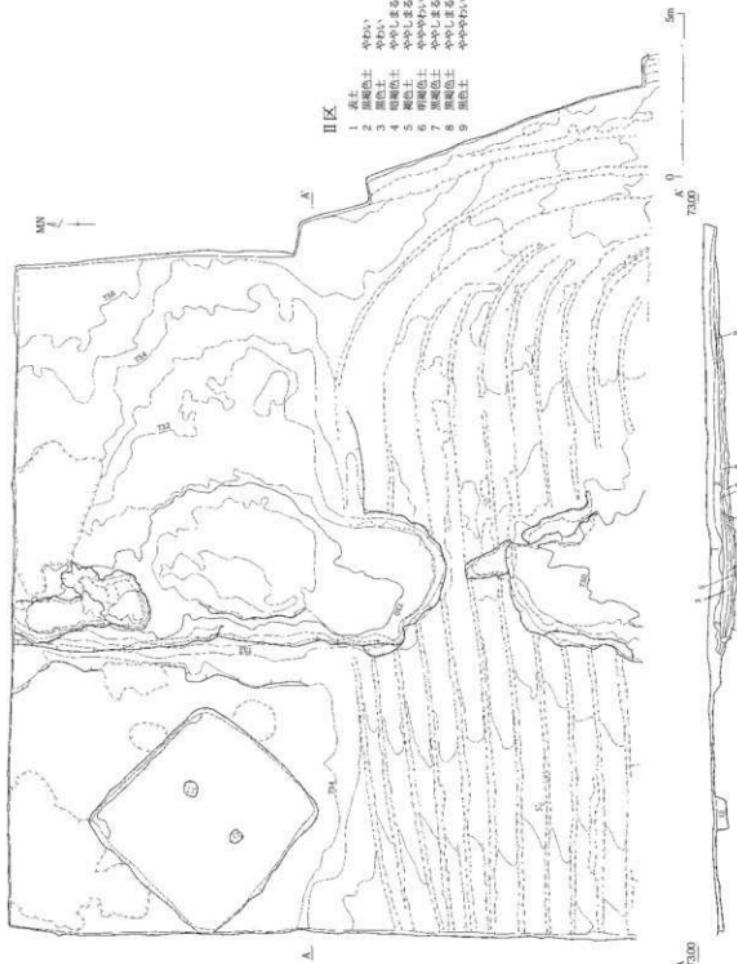


II・III区間断面図

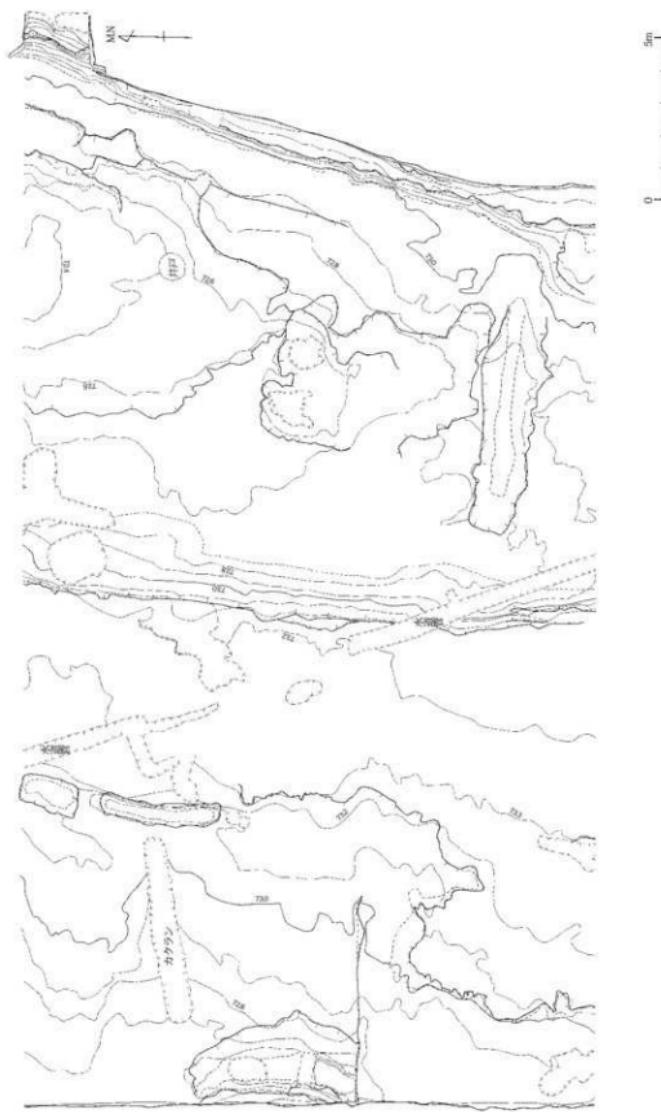
1 表土	8 黒色土	16 喬褐色土	24 喬褐色土
2 黒色土	9 喬褐色土	17 喬褐色土	25 喬褐色土
3 黒色土	砂質でやわい	10 喬褐色土	26 黒褐色土
4 黒色土	やわい	11 アカホヤブロック	27 黒褐色土
5 黒色土	やわい	12 喬褐色ブロック	28 喬褐色土
6 黒色土	やわい	13 濃土多く含む	29 喬褐色土
7 黒色土	やわい	14 黒色土	30 黒褐色土
		15 深褐色土	31 喬褐色土
		やわい	やわい
		濃土	やわい
			やわい

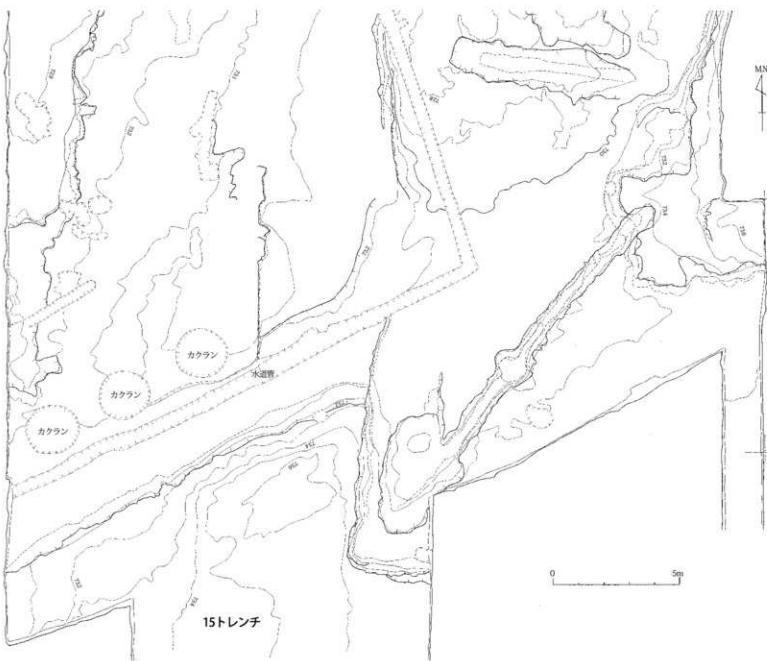
1 表土
2 黒色土
3 黒色土
4 黒色土
5 黒色土
6 黒色土
7 黒色土
8 黒色土
9 喬褐色土
10 喬褐色土
11 アカホヤブロック
12 喬褐色ブロック
13 濃土多く含む
14 黒色土
15 深褐色土
16 喬褐色土
17 喬褐色土
18 喬褐色土
19 黒褐色土
20 黑色土
21 喬褐色土
22 深褐色土
23 喬褐色土
24 喬褐色土
25 喬褐色土
26 黑褐色土
27 黑褐色土
28 喬褐色土
29 喬褐色土
30 黑褐色土
31 喬褐色土

図版17 II区南側平面図・断面図

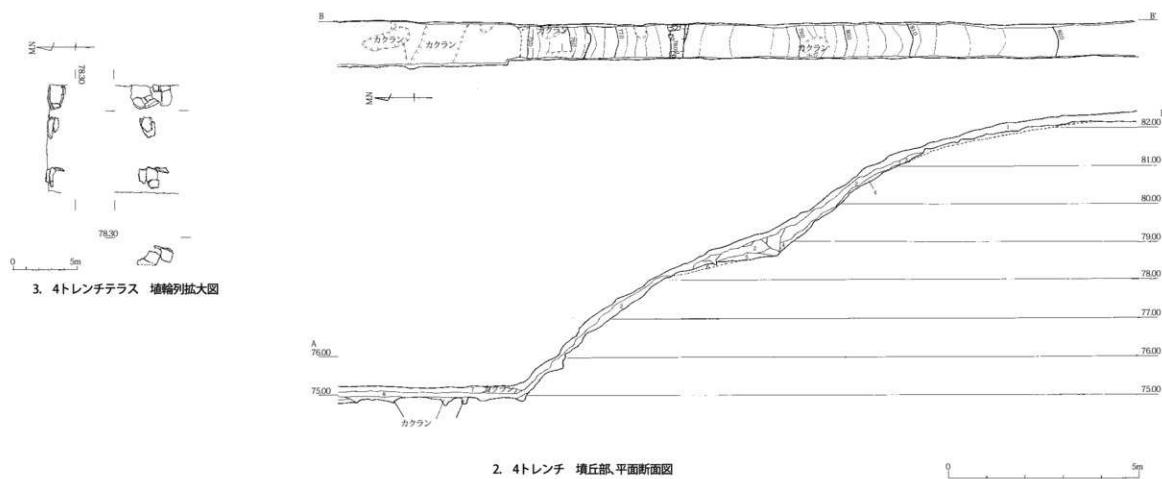
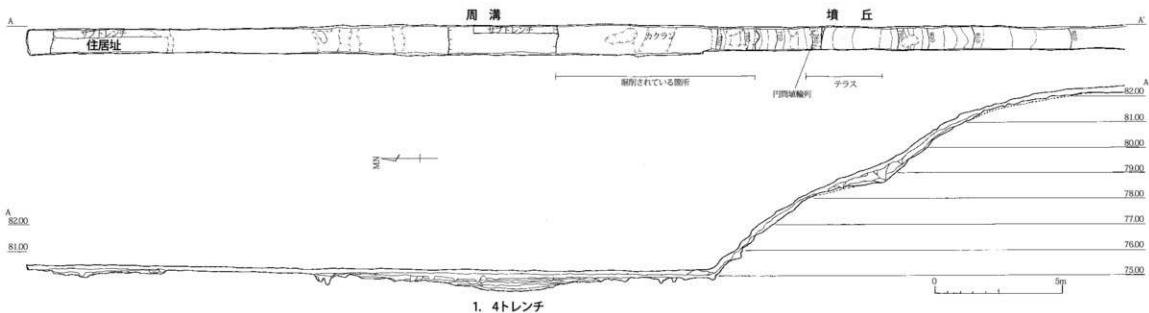


図版18 II区北側平面図・断面図

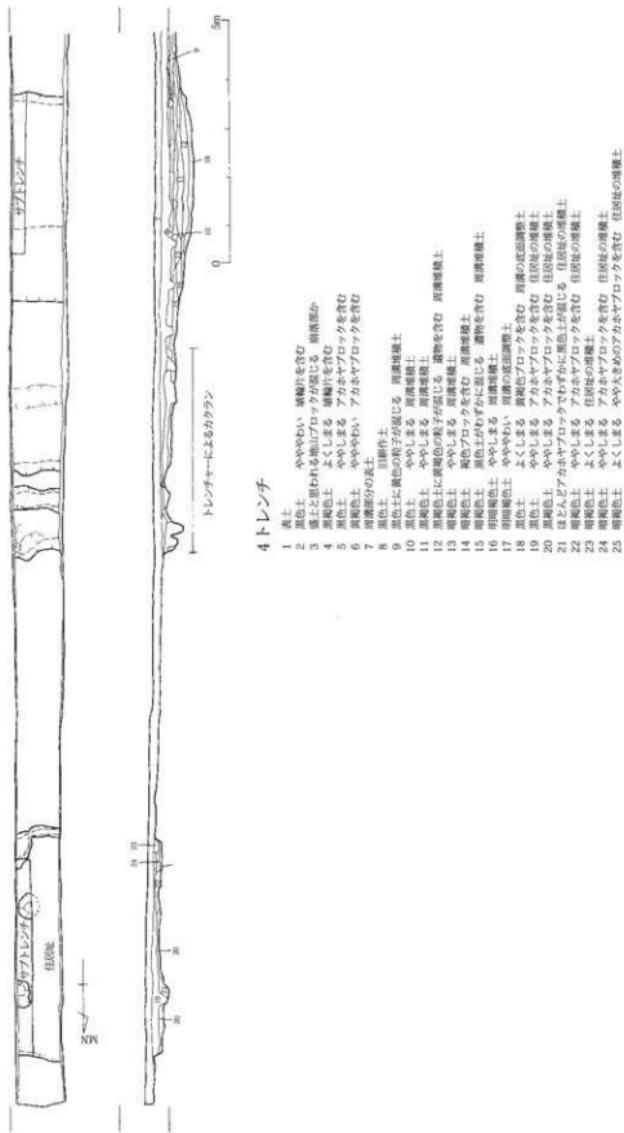




図版20 II区南側平面図



図版21 4トレンチ平面図・断面図①・塗輪列拡大図



図版22 4トレンチ平面図・断面図(②)

ことから、周溝の埋設にはかなりの期間を要したようである。

周堤・外周溝

アカホヤ層は調査区南西側のごく一部しか残存しておらず、上面は大きく掘削されている。また、II区ではトレンチャーによる擾乱がほぼ全面に及び、それ以外でも水道管や造園に伴う擾乱が多い箇所である。周堤は墳端から12~16mに位置し、一部に外側を巡る外周溝を確認したことから、検出面での幅は場所によって差があるものの5~6mである。築造当初は盛土があったと思われることから、実際はもう少し狭かったのではないだろうか。外周溝は後述する各トレントの調査でも部分的に検出されているが、全周していたか判然としない。本調査区内でも部分的でしか検出されていないが、検出されていない箇所でも平坦面から外方に向けて徐々に低くなっているため、周堤を意識していたことは間違いないと思われる。外周溝は良好な場所での幅は1mで検出面からの深さは30cmである。

土橋

くびれ部の北側で周溝掘削時の地山を掘り残すような形で検出した。後に検出した横穴式石室に向かっているため、埋葬時に使用した土橋の可能性が高い。墳丘側では幅が11mあるが、周堤から3m付近で両側から狭くなり、最も狭い場所では幅2mとなる。検出時の高さは周堤とほぼ同じだが、使用時には墓道に向かって盛土があったはずである。そして埋葬終了後には盛土が撤去され、周堤と墳丘は遮断されたと思われる。

出土遺物

周溝内と周堤外側で大量の埴輪片が出土した。須恵器片も含まれるが量は少ない。周溝内の墳丘側では円筒埴輪が中心で、本来墳頂やテラスに樹立していた埴輪列から転落したものである。周堤側ではほとんどが形象埴輪で、周堤上に樹立していたものであろう。これらは北側では土橋部分から始まり、南に向かって40mほど続いている。形象埴輪は周堤外側でも大量に出土している。形象埴輪の種類は人物、動物、家、櫛、太刀、太鼓などにわたり総数60個体を数える。出土状況の詳細については次年度発行予定の遺物編で述べる予定であるが、本来は盛土が施された周堤上に並べられたものが転落したものである。原位置を留めているものもなく、当時の配置を復元するのは困難である。

4 トレント

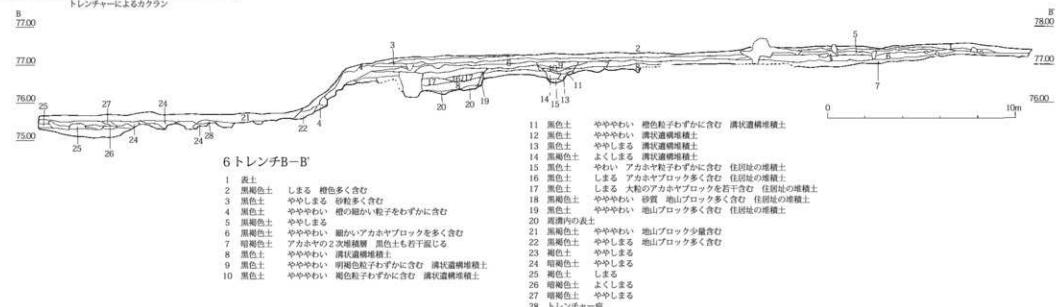
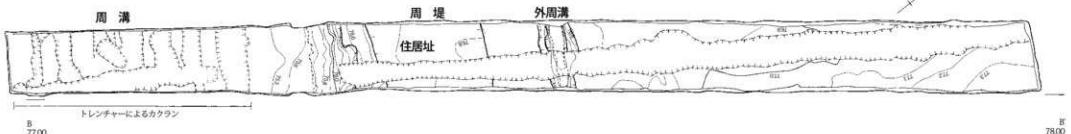
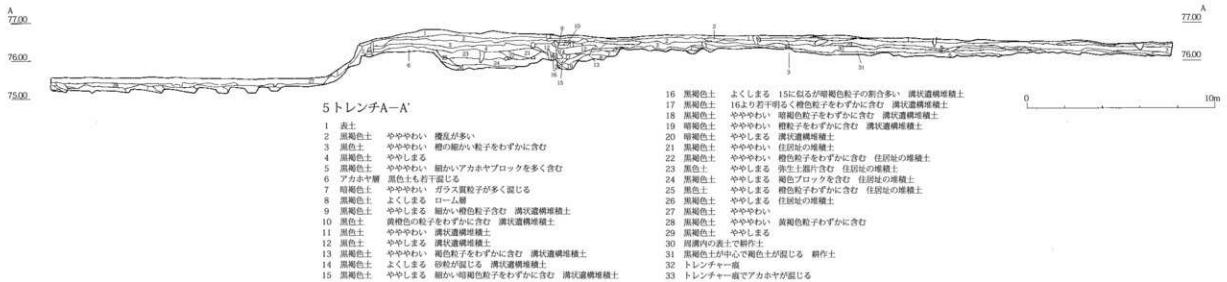
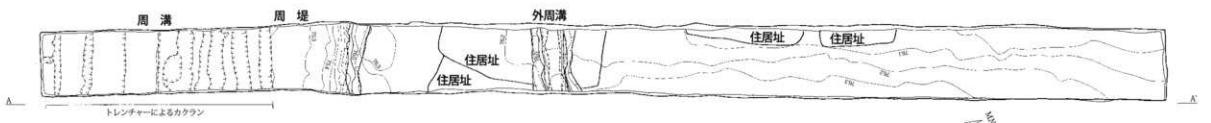
後円部墳頂の中心部から北方向に設定した。幅1m、長さ41mの調査区である。墳丘部の調査については次節で述べる。

周溝

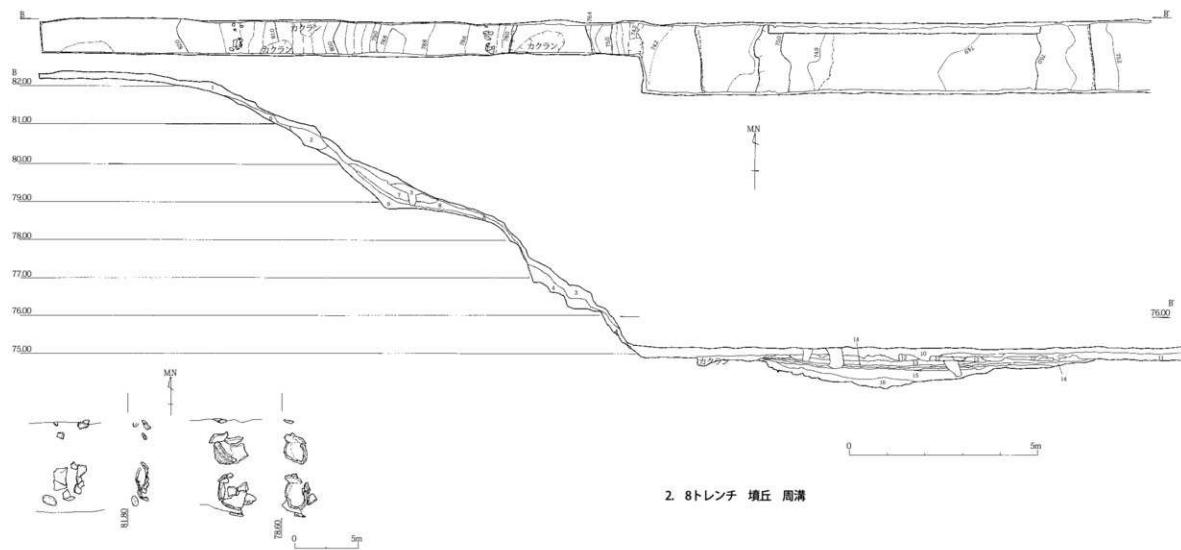
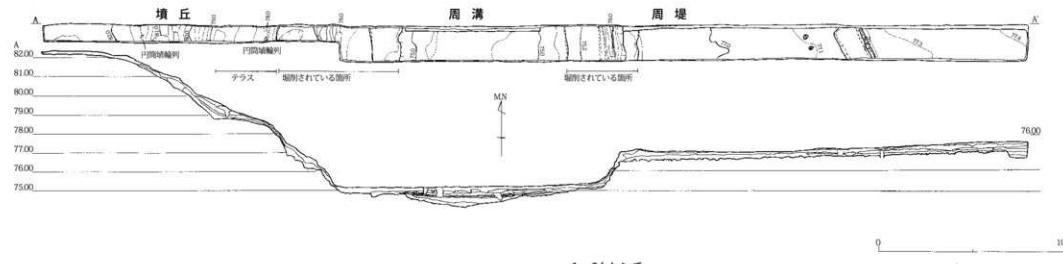
黒色系の埋土が確認できるものの、上面は大きく擾乱されている。このため、墳端と同様に周堤の痕跡も確認することはできない。

5 トレント

北東部の周堤を確認するための調査区で、長さ約23m、幅2mに設定した。この周辺は戦後の開拓後長く山林になっていたが、平成8年度に町有地として買取し、伐採整理した。北側は59号墳との間にある溝地で、常時湧水がたまる湿地帯となっている。

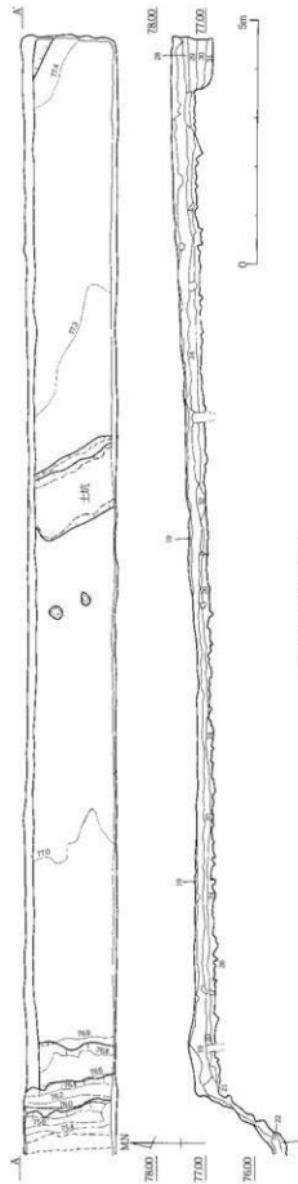


図版23 5・6トレンチ平面図・断面図



3. 填頂(左)・テラス(右)の円筒埴輪列

図版24 8トレンチ平面図・断面図①・埴輪列拡大図



図版25 8トレンチ平面図・断面図②

卜筮子

- | 8 レンチ | |
|----------|------------------------|
| 1 植生の灰土。 | 17 南褐色土。 |
| 2 灰色土。 | 18 オレンジバニスを含む地山。 |
| 3 灰色土。 | 19 周囲の地表土。 |
| 4 灰色土。 | 20 日照受け表土。 |
| 5 黄褐色土。 | 21 黒色土。やせい。 |
| 6 黄褐色土。 | 22 稲作土。 |
| 7 黄褐色土。 | 23 22とは同じだが硬質。 |
| 8 黄褐色土。 | 24 黒色土。やせい。 |
| 9 黄褐色土。 | 25 黑褐色土。アホウドリコロクを含む。 |
| 10 黄褐色土。 | 26 黑褐色土。アホウドリコロクの自然鉱物。 |
| 11 黄褐色土。 | 27 黑褐色土。アホウドリコロク多く含む。 |
| 12 黄褐色土。 | 28 黑褐色土。住吉村の標準土。 |
| 13 黄褐色土。 | 29 黑褐色土。アホウドリコロク多く含む。 |
| 14 黄褐色土。 | 30 黑褐色土。やせい。 |
| 15 黄褐色土。 | 31 黑褐色土。やせい。 |
| 16 黄褐色土。 | 32 黑褐色土。オレンジバニスを含む。 |
| | 33 黑褐色土。アホウドリコロクを含む。 |
| | 34 黑褐色土。アホウドリコロク多く含む。 |

8トレンチ②(周辺部)

- | | | | |
|----|------|----|-------------|
| 17 | 南北色土 | 18 | オレガノバミを食む地山 |
| 19 | 南北色土 | 20 | 日向原野土 |
| 21 | 南北色土 | 22 | 南北色土 |
| 23 | 南北色土 | 24 | 南北色土 |
| 25 | 南北色土 | 26 | 南北色土 |
| 27 | 南北色土 | 28 | 南北色土 |
| 29 | 南北色土 | 30 | 南北色土 |
| 31 | 南北色土 | 32 | 南北色土 |
| 33 | 南北色土 | | |

調査内容

アカホヤ層上面のクロボクが予想以上に遺存していたことから、クロボク層を検出面として遺構精査を行った。その結果、4基の住居址と溝状遺構を検出した。住居はいずれも弥生時代中期後半頃のもので、溝状遺構はこれらの住居址を掘削してトレンチに直交する状態で検出された。みかけの周堤肩部からは約4.6mに位置し、幅約1m、深さ約35cmを測る。周堤を区画する外周溝だろう。遺構内からは円筒埴輪片を検出したが、外堤上で埴輪の樹立を確認することはできなかった。おそらくクロボク層の上面には盛土が施されていたが、既に流出してしまったと考えられる。周溝内はトレンチャーによる擾乱が地山面まで及んでおり、黒色系の周溝埋土は残っていない。このため築造当初の周堤への立ち上がりの位置などは把握できないが、後述する8~10トレンチの調査成果から、現状より1m以上墳丘寄りだったと思われる。6・7トレンチも同様である。

6トレンチ

北東部の周堤を確認するために、5トレンチの南側に設定した。長さ約20m、幅2mの調査区である。

調査内容

見かけの周堤肩部から5m外方に溝状遺構を検出した。幅1m、深さ40cmで、周堤を区画する外周掘の可能性が高い。

7トレンチ

6トレンチの南に設定した。調査区は幅2m、長さ23mである。

調査の内容

見かけの周堤肩部から5m外方に溝状遺構を検出した。周堤を区画する外周掘の可能性が高いが、幅0.7m、深さも15cmと5トレンチや6トレンチに比べて規模が小さくなる。埴輪の樹立は確認されていない。

8トレンチ

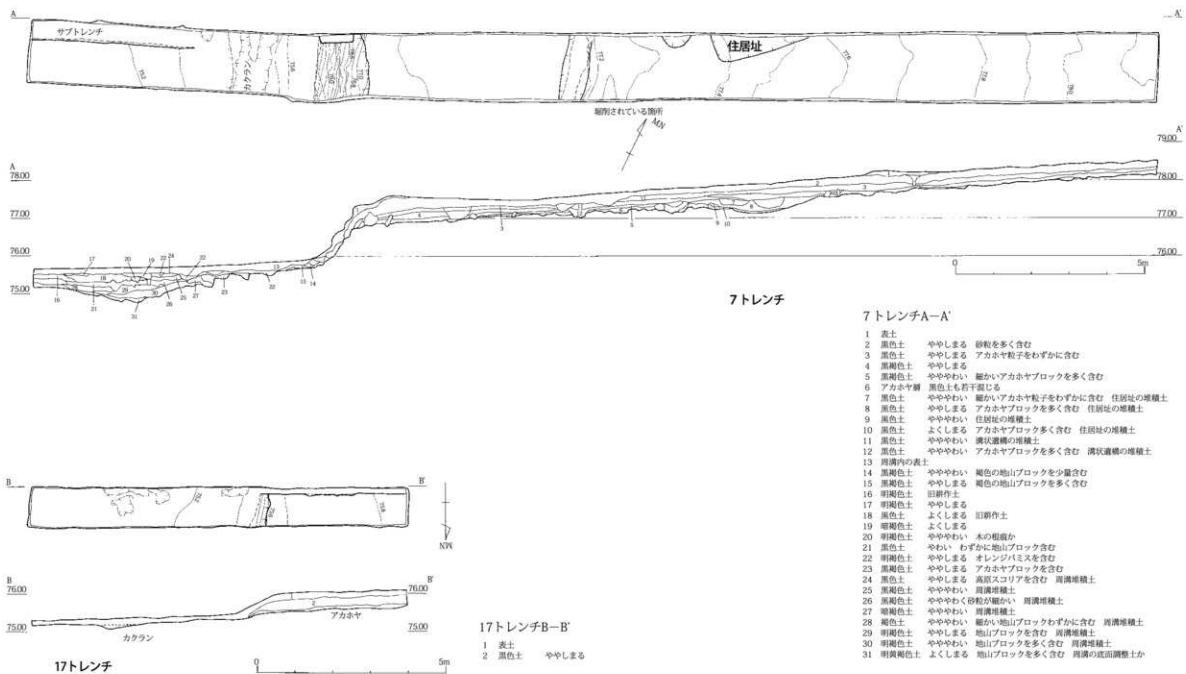
後円部墳頂から東側周堤に向かって設定したトレンチで、墳丘では幅1m、周溝より外方では幅2m、長さ52mである。墳丘部の調査結果は次節で述べる。

周溝部

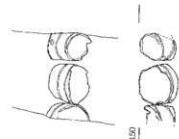
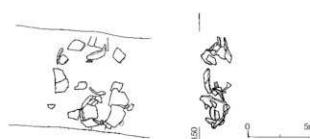
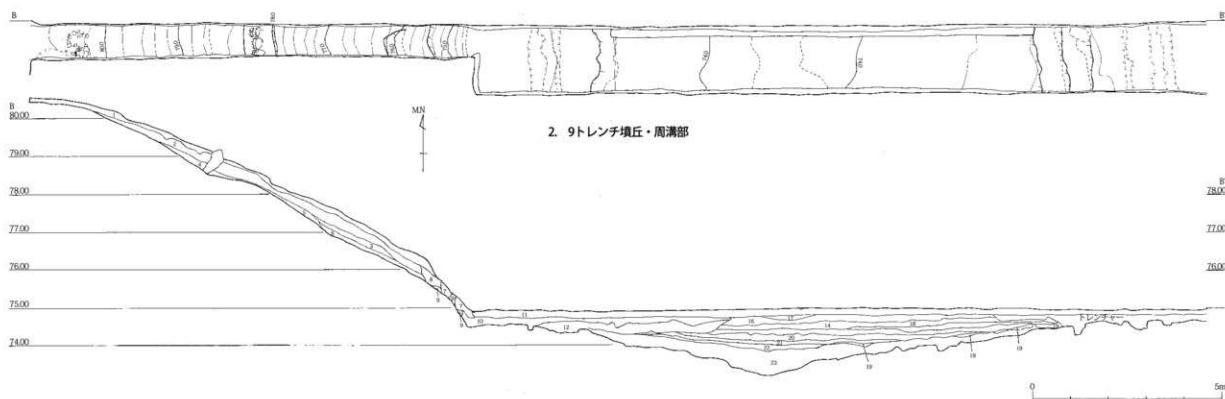
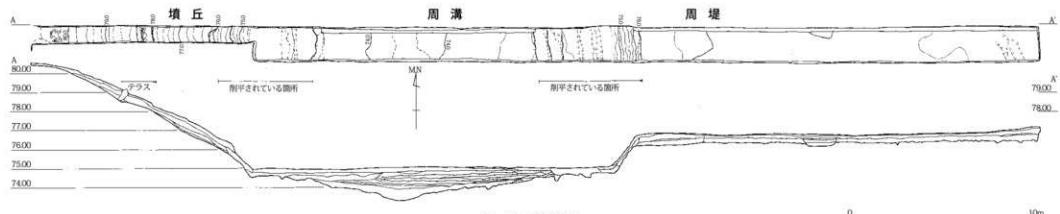
墳端と周堤への立ち上がり部分については大きく擾乱されているために、築造時の形状が判然としない。墳端は3m、周堤への立ち上がりは2.5mほど周溝寄りであった可能性が高い。周溝内には黒色系の埋土が堆積し、残存状態が良好な場所では高原スコリアが確認できる。周溝底面は一度掘削されたのちに、凹凸部を被覆調整してならしている。埋土から円筒埴輪片を検出したが、周堤寄りからも出土することから、周堤にも樹立していた可能性がある。

周堤部

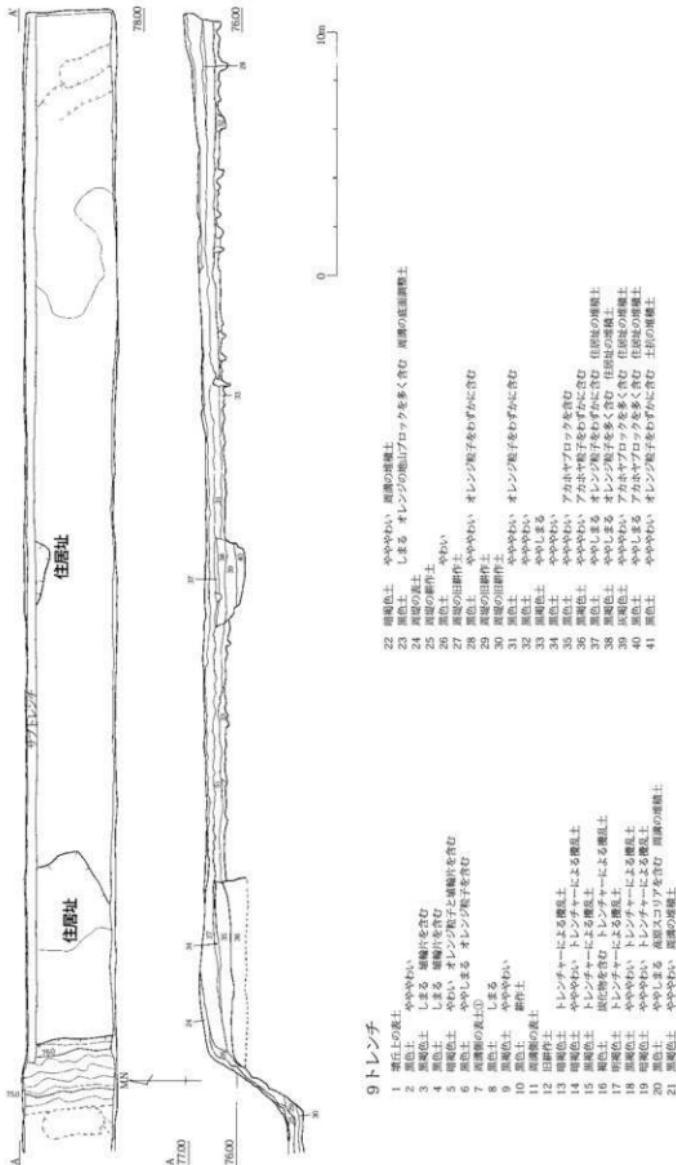
アカホヤ上面のクロボク層が残存している。現状の周堤肩部から11mの外方に幅1.2mの土抗を検出した。周堤を区画する外周溝だとすると周堤幅が広くなりすぎるので、古墳とは無関係の可能性が高い。



図版26 7・17トレンチ平面図・断面図



図版27 9トレンチ平面図・断面図①・埴輪列拡大図



図版28 9トレンチ平面図・断面図(2)

9 トレンチ

東側くびれ部付近に、墳頂から東側周堤まで設定した。墳丘部の幅1m、周溝より外方では2m、長さは52mである。墳丘部の調査は次節で述べる。

周溝

墳端は大きく攢乱されており、現状より2mほど広がるようだ。周堤への立ち上がりも現状より2m以上周溝寄りになると思われる。埋土の堆積状況は8トレンチとはほぼ同じで、底面は掘削後に凹凸調整を行っている。埴輪片を検出したが少量で、周堤上に樹立されていたかどうか判然としない。

周堤

8トレンチと同様にクロボク層が残存しているが、周堤を区画する外周掘は確認できない。このため築造当時の周堤幅は不明である。

10 トレンチ

前方部墳頂から東側周堤まで設定した。墳丘部の幅1m、周溝より外方では2m、長さは48mである。

周溝

埋土の堆積状況や底面は8トレンチや9トレンチと同様である。墳端は現状よりも3mほど広がると思われ、周堤への立ち上がりも2.5m以上広がるようだ。埴輪片を検出したが少量で、周堤上に樹立されていたかどうか判然としない。

周堤

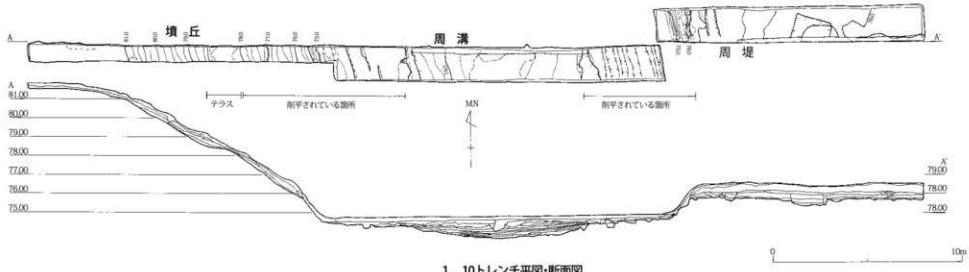
みかけの周堤肩部から1m外方で溝状遺構を検出した。幅1m、深さは0.8mを測る。周堤を区画する外周掘だとすると周堤幅があまりに狭くなるので、本古墳とは無関係である可能性が高い。

11 トレンチ

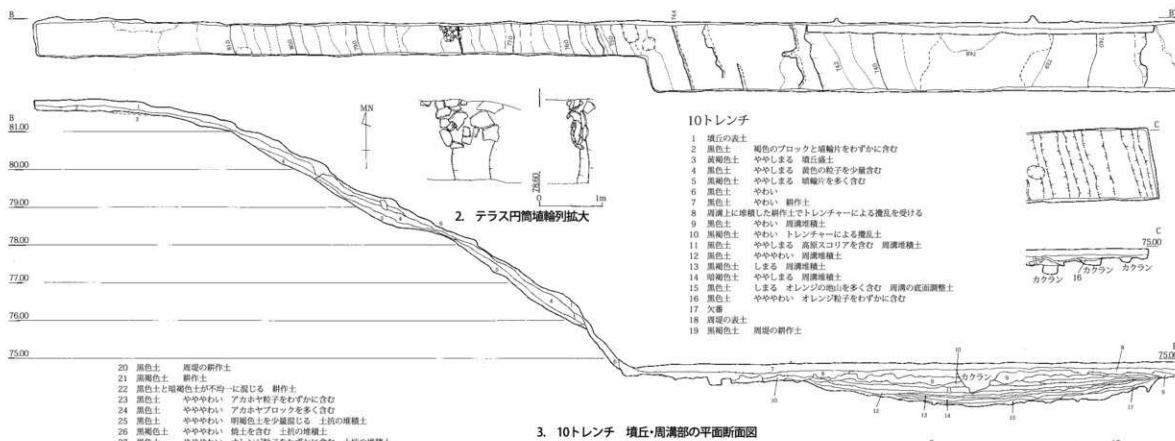
前方部前端線の東側に設定した。調査区は幅2m、長さ30mである。

調査内容

喜界アカホヤ層は完全に失われ、下層のローム層での遺構検出を試みたが、周溝・周堤の痕跡は認められず、墳端も大きく掘削されていた。堆積土もほとんどなく遺物は埴輪片が少量検出できたにすぎない。



1. 10トレンチ平図・断面図

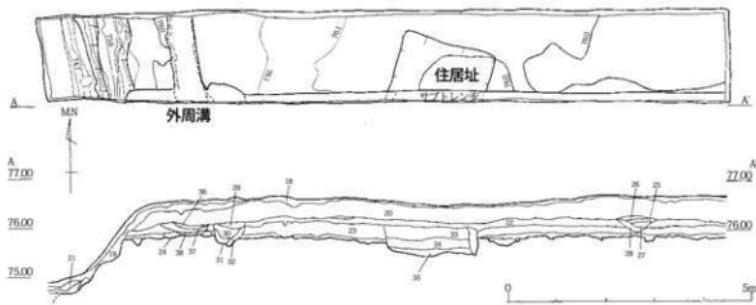


2. テラス円筒埴輪列拡大

3. 10トレンチ 塚丘・周溝部の平面断面図

- 20 黒色土 周溝の耕作土
- 21 黒褐色土 耕作土
- 22 黒色土 と地盤改良材を含む土に埋まる 粘土土
- 23 やややわかい アカホヤブロッコを多く含む
- 24 黒色土 やややわかい アカホヤブロッコを多く含む
- 25 黒色土 やややわかい 明麗色土を少量混じる 土浜の堆積土
- 26 黒褐色土 やややわかい 地上を含む 土浜の堆積土
- 27 黒色土 やややわかい 地上を含む 土浜の堆積土
- 28 黒色土 やややわかい アカホヤブロッコを多く含む 土浜の堆積土
- 29 黒色土 やややわかい 初乾を含む 土浜の堆積土
- 30 黒色土 やややわかい 明麗色土を少量含む 土浜の堆積土
- 31 黒色土 やややわかい 地上を含む 土浜の堆積土
- 32 黑褐色土 やややわかい アカホヤブロッコを含む 土浜の堆積土
- 33 黑色土 やややわかい オレンジ色土を少しだけ含む
- 34 黑色土 やややわかい アカホヤブロッコを多く含む 住居場の堆積土
- 35 黑色土 やややわかい アカホヤブロッコを多く含む 住居場の堆積土
- 36 黒色土 やややわかい 明麗色の粘土を少しだけ含む 土浜堆積の堆積土
- 37 黑色土 やややわかい 住居場の堆積土
- 38 黑色土 やややわかい 住居場の堆積土

図版29 10トレンチ平面図・断面図①・埴輪列拡大図



図版30 10トレンチ平面図・断面図②

12トレンチ

前方部頂から南に向かって設定したトレンチで、幅2m、長さは40mに及ぶ。

周溝・周堤部

周溝の最深部は現地表から1.5mを測る。周堤部は畑の耕作で溝状の擾乱が目立ち、周堤を区画する外周溝が検出できなかったため幅は不明である。

出土遺物

墳頂・テラス上には円筒埴輪を樹立した痕跡は確認できない。ただし、堆積土中には埴輪片が多く含まれるため、前方部頂にも円筒埴輪列が樹立されていたのは確実である。

テラス上では盾形埴輪片がまとまって出土した。テラス端部が崩壊している影響で、当初の樹立位置からは動いているが、IV区でも破片が確認されていることから、円筒埴輪列のなかに盾形埴輪も要所で並べられていたと考えられる。

周溝部では11・13トレンチより堆積土が厚いため、土中から円筒埴輪片が大量に出土している。大半は埴丘から転落したものと思われるが、周堤付近でも確認できることから、周堤上にも並んでいた可能性がある。

13トレンチ

西側の前方部墳端に設定した。III区の延長線上に設定し、調査区は長さ30m、幅2mである。

調査内容

墳端はIII区で既に調査され、大きく掘削されているものの、端部が確認されている。周溝部は擾乱が及んでいるが最深部で約70cmを測る。周堤を区画する外周掘が確認できなかったため、周堤の幅は不明で、遺物も確認できない。

14トレンチ

周溝・周堤の西隅角を確認するために設定した。

周溝・周堤

表土は薄く検出面は喜界アカホヤの下層である褐色ローム層であった。周溝は隅角に位置し、ほぼ直角に曲がるようすが分かる。

出土遺物

円筒埴輪片を多く検出した。周堤から周溝内に転落した状態ではほぼ1個体分の円筒埴輪を検出したことから、墳丘上だけでなく周堤上にも円筒埴輪を樹立していたことが初めて確認できた。ただし、墳丘上のように高密度で並んでいたわけではなく、隅角などの要所のみに樹立されていた可能性がある。埴輪は墳丘上に樹立していたものと同規格である。

15トレンチ

周溝・周堤の東側隅角の形状を確認するために設定した。

周溝・周堤

東側は最近の掘削で急崖となっており、これに沿って北の畑地に上がるための農道がある。さらに道に沿って畑地の拡幅が行われたため、現状では見かけの周堤肩部も南の方向に低くなり消えて行くように見える。

表土は全体的に薄く、農道のある箇所にだけ喜界アカホヤ層が認められた。周堤肩部は見かけの肩部より1.5m墳丘寄りで確認できた。周溝内は全体に地山ブロックを被覆調整した箇所が多い。埴輪片などの遺物が少ないが、これは堆積土の大半が失われているためである。

周堤の東側は急崖となり既に失われているため、この部分での周堤の幅は不明である。南側でも農道や畑地掘削による攪乱が激しいが、外周溝の一部が確認でき、埴輪片が少量だが転落していた。このことから本トレンチ南側における周堤の幅は5.6m以下であることが分かる。

16トレンチ

墳丘北西側の周溝や周堤の検出を目的としたトレンチで幅1m、長さ15.5mの調査区である。

調査の内容

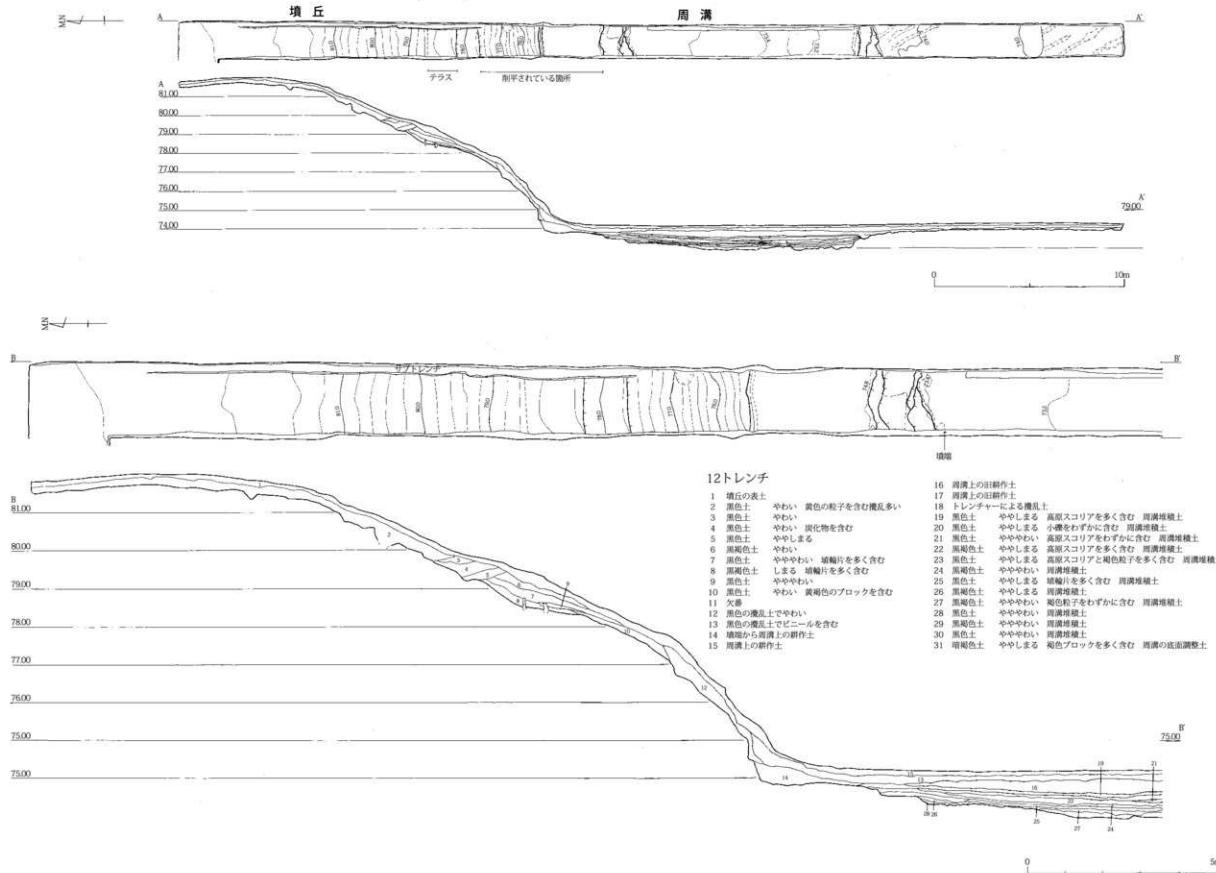
調査以前は痕跡が全く確認できなかったが、周溝から周堤へといたる立ち上がりを確認した。また、周堤肩部から6.7m外方に構状遺構を検出した。幅70cm、深さ20cmで、検出位置や埋土の状況から周堤を区画するための外周溝の可能性が高い。

17トレンチ

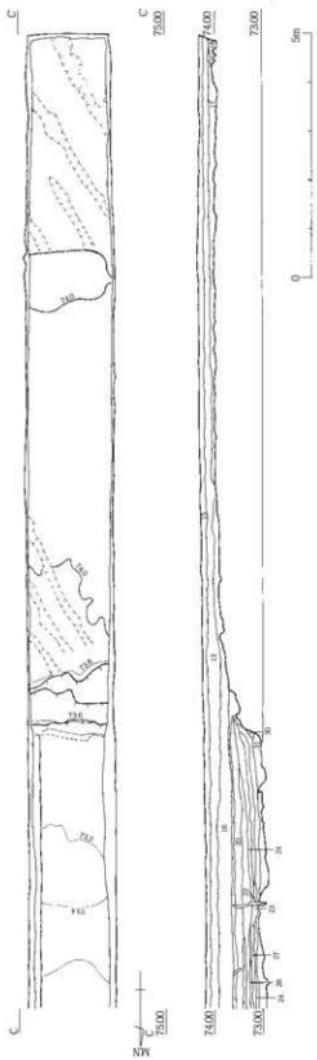
4トレンチの北側に設定した東西方向に延びるトレンチで、幅1m、長さ10mの調査区である。

調査の内容

現状では本トレンチの中央付近が段差となっている。東側ではクロボク層が残存しており、西側の段差を境にクロボク層は失われているもののアカホヤ層は残っている。遺構や遺物は出土していない。



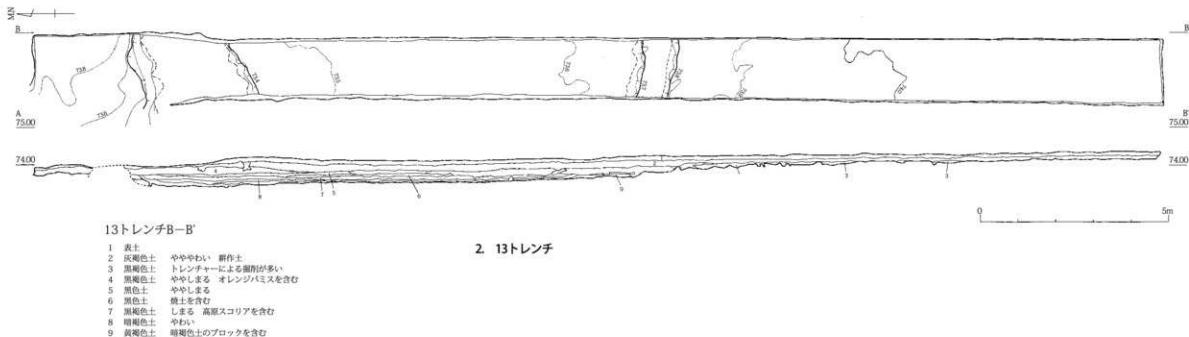
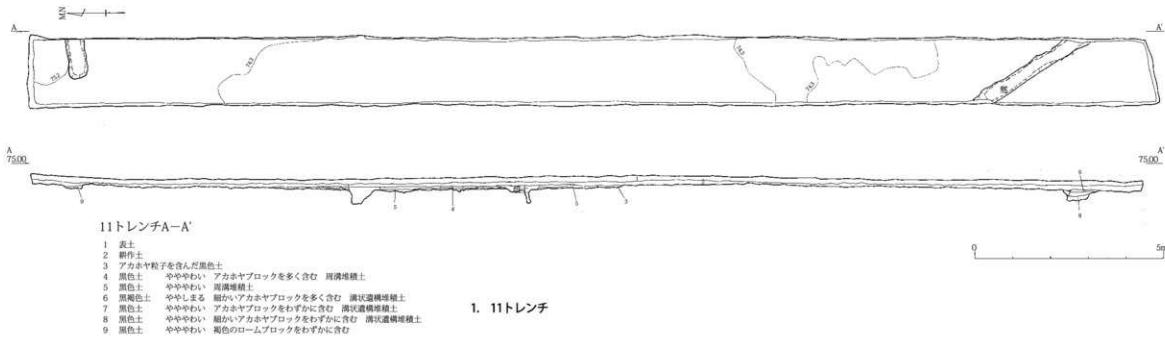
図版31 12トレンチ平面図・断面図①



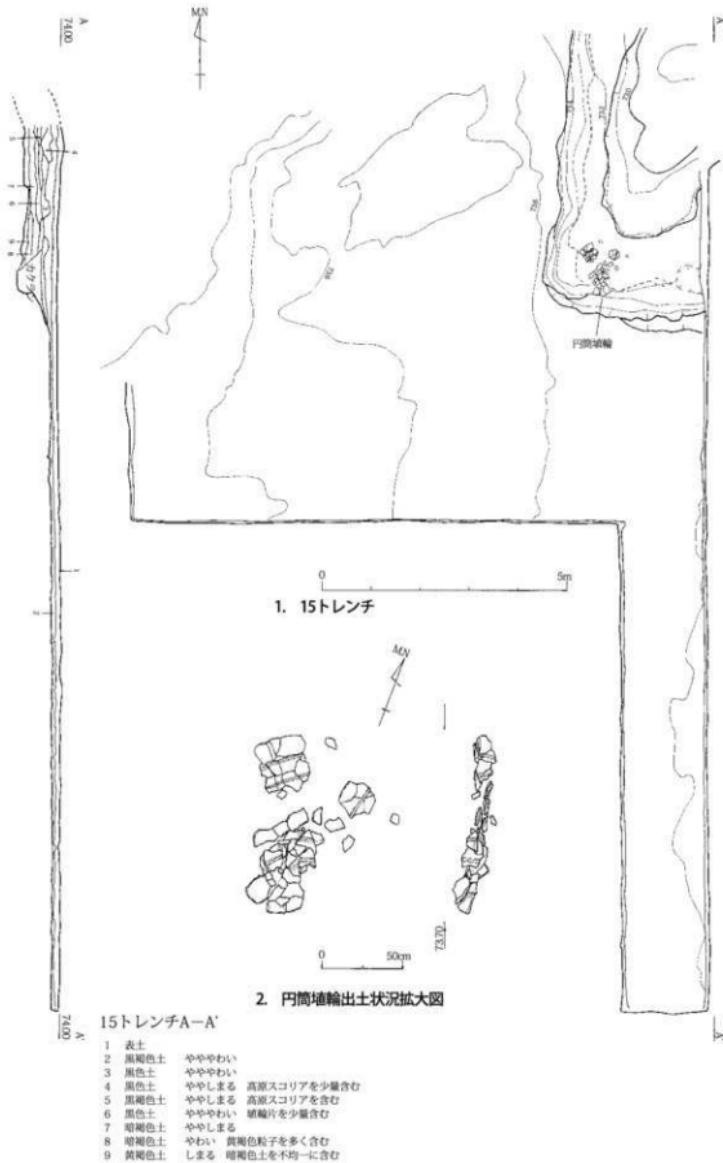
図版32 12トレンチ平面図・断面図②



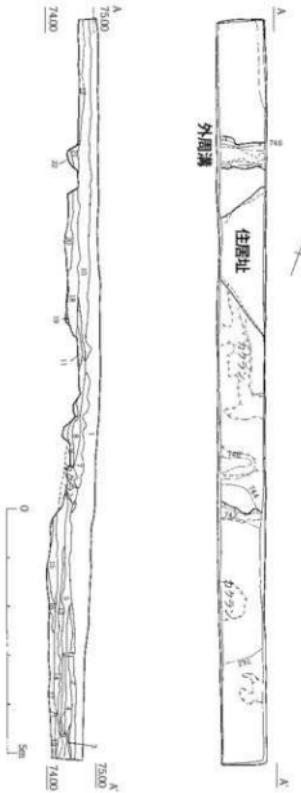
図版33 14トレンチ平面図・断面図



図版34 11・13トレンチ平面図・断面図



図版35 15トレンチ平面図・断面図



16トレンチA-A'

- 1 表土
- 2 明褐色土 よくしまる 遺物を含む
- 3 明褐色土 よくしまる
- 4 明褐色土 ややしまる
- 5 黒褐色土 よくしまる
- 6 黒色土 ややしまる
- 7 明褐色土 ややしまる
- 8 黒色土 やややわい
- 9 明褐色土 やややわい
- 10 黑褐色土 よくしまる
- 11 にぶいオリーブ色土 やややわい 遺物を含む
- 12 アカホヤ火山灰
- 13 黒色土 ややしまる 高原スコリアを含む 岩塊堆積土
- 14 黒色土 ややしまる 遺物を含む 岩塊堆積土
- 15 明褐色土 ややしまる 遺物を含む 岩塊堆積土
- 16 にぶいオリーブ色土 ややしまる 遺物を含む 岩塊堆積土
- 17 細色土 ややしまる 岩塊堆積土
- 18 黑色土 よくしまる アカホヤブロックを含む 住居址の堆積土
- 19 黑褐色土 よくしまる 住居址の堆積土
- 20 黑色土 ややしまる 住居址の堆積土
- 21 黑色土 ややしまる アカホヤブロックを含む
- 22 黑褐色土 ややしまる 細かいアカホヤブロックを含む

図版36 16トレンチ平面図・断面図

(2) 墳丘部の調査

墳丘部の調査は北側と西側から実施していった。測量調査の時点で2段築成であることが分かっていたため、テラスの位置や規模、埴輪列の有無や墳頂、墳端の状態などを重視して調査を行った。また、横穴式石室の存在が予想された後円部西側については、面的な調査を実施した(IV区)。

1 レンチ

後円部墳頂端から北西方向に設定した。幅2.5m、長さ20mの調査区である。

調査の内容

墳丘から周溝まで調査区を設定したが、周溝内は擾乱が激しく、黒色系の埋土は確認されていない。墳端も擾乱により急崖となっており、築造当初は現況より2~3mほど広がると思われる。テラスは幅2.4mで遺存しているが、完全な平坦ではなく緩やかな傾斜がある。テラス上では円筒埴輪列を検出した。ほとんどが基底部のみの残存となっており、土圧により倒壊、変形しているため、掘方は確認できなかたが、復元するとはば近接して並べられていた可能性が高い。

テラスから墳頂に向けた墳丘第2段目には、幅約1.5m、長さ約2mの穴が掘られている。穴の埋土には高原スコリアを含んでいることから、近年の擾乱ではないが、掘削された原因は不明。

墳頂での円筒埴輪列は確認できなかつた。

2 レンチ

西側のくびれ部から墳頂に向けて設定し、墳頂からは南の前方部頂に向けて延長した。逆L字形の調査区である。墳丘斜面では幅2mで、墳頂部では幅1mで、長さ34mの調査区である。

調査の内容

墳端は擾乱され、現状より2mほど拡がるようだ。墳丘の1段目斜面も土砂の流出が著しい。テラスは標高77.1m付近で傾斜が緩くなる箇所が確認されている。幅は1mほどで埴輪片が散在しているが埴輪列の痕跡は認められない。流出した可能性が高い。墳頂でも埴輪列は確認できないが、埴輪片は出土する。

3 レンチ

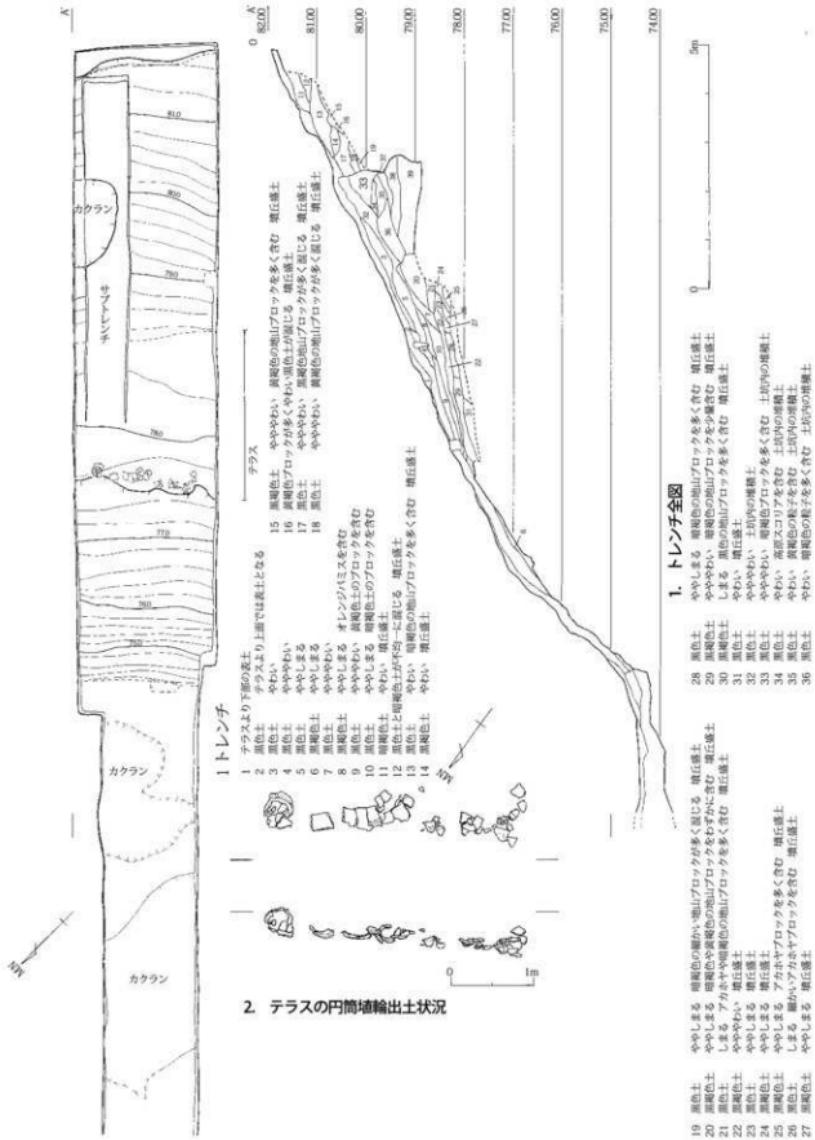
前方部墳頂から西方向に設定した。幅2m、長さ18mの調査区で、墳頂部では12レンチと直交する。

調査の内容

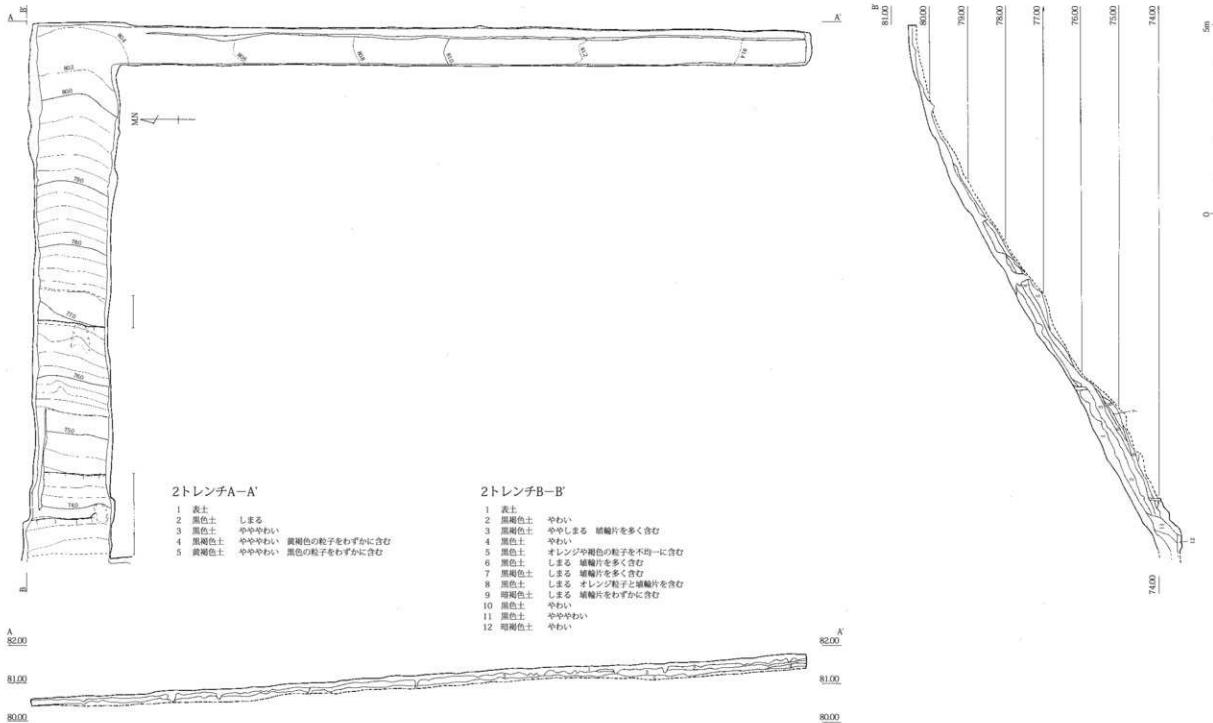
墳端は擾乱されており、現状より1.5mほど広がるようだ。テラスは標高78.3m付近で傾斜変換が認められるが、明瞭ではない。テラスと墳頂で埴輪片が確認できるものの、埴輪列としての形狀ではない。本古墳では、東側に比べて、西側でのテラスや円筒埴輪列の遺存度が悪くなっている。古墳が東から西に傾斜する地形の影響を受けているものと思われる。

4 レンチ

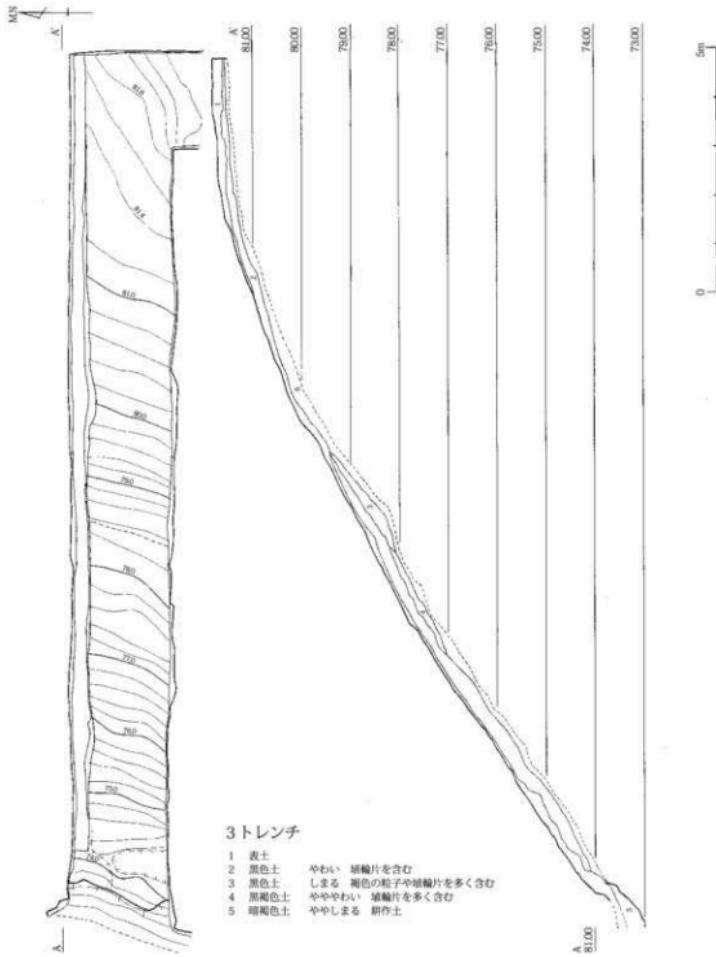
後円部墳頂の中心部から北方向に設定した。幅1m、長さ41mの調査区である。



図版37 1トレンチ平面図・断面図・埴輪列拡大図



図版38 2トレンチ平面図・断面図



図版39 3トレンチ平面図・断面図

墳丘

段築の様子が調査以前からはっきりしており、調査の結果幅2.5mのテラスを確認することができた。完全な平坦ではなく緩やかに傾斜する。円筒埴輪列は基底部が横倒しの状態で検出された。埴輪は2個体分で、動いているものの原位置に近いと思われる。墳頂では埴輪列の痕跡は確認できなかった。元々あったが流出した可能性が高い。墳端はかなり大きく攪乱されており、現状より3m以上広がるものと思われる。

周溝

黒色系の埋土が確認できるものの、上面は大きく攪乱されている。このため、墳端と同様に周堤の痕跡も確認することはできない。

8トレンチ

後凹部墳頂から東側周堤に向かって設定したトレンチで、墳丘では幅1m、周溝より外方では幅2m、長さ52mである。

墳丘部

墳頂で円筒埴輪の基底部を数片確認した。多少動いているものの原位置に近いと思われる。テラスは墳丘の中段、標高78m付近で確認された。平坦面の幅2.5mと、後述する9・10トレンチに比べると広くなっている。外端には円筒埴輪の基底部が3本出土した。土圧で外方に倒れているものの、底部はほぼ原位置に近い。テラスより下は流出と人工的な攪乱によって急崖となっている。

9トレンチ

東側くびれ部付近に、墳頂から東側周堤まで設定した。墳丘部の幅1m、周溝より外方では2m、長さは52mである。

墳丘部

墳頂部では円筒埴輪片を検出したが、横倒しになってしまっており、原位置から動いている。しかし、後凹部だけでなく前方部頂にも円筒埴輪列が存在していたことが判明した。テラスには3本の円筒埴輪を検出した。3段目まで遺存しており、土圧により外方に傾いているものの、ほぼ原位置を留めているものと思われる。テラス幅は1mと狭くなっている。本古墳では後凹部で広く、前方部では狭い可能性が高い。テラスより下方では8トレンチと同様に攪乱されており急崖となっている。

10トレンチ

前方部墳頂から東側周堤まで設定した。墳丘部の幅1m、周溝より外方では2m、長さは48mである。

墳丘

墳頂とテラス部で円筒埴輪片を検出したが、9トレンチに比べると遺存度が悪く、原位置からも動いていると思われる。テラス幅は1mとなっている。テラス下方は大きな攪乱を受けており、とくに墳端に近くなるにつれ、急崖となっている。

12トレンチ

前方部頂から南に向かって設定したトレンチで、幅2m、長さは40mに及ぶ。

墳丘部

墳丘の第1段斜面は大きく擾乱され急崖となっている。墳端は見かけよりも3.5m以上外で検出できた。テラスは標高78.4m付近で傾斜が緩くなる箇所があり、幅は1.5mほどである。2段目斜面は部分的な擾乱はあるものの比較的良好な状態で遺存しており、本トレンチでの前方部最高点は標高81.7mを測る。

IV区

調査区の範囲と土層

後円部中心からクビレ部の状態、および以前から横穴式石室があることが想定されたために設定した。東西25m、南北25mの約650m²を対象となる。墳丘段部はⅡ区と調査範囲が一部重複する。

盛土は喜界アカホヤ層上層のクロボク層から盛られている。したがって旧地表面は見かけの墳端からから約1m高い位置になる。墳丘を構成する盛土は周溝を掘削した土を利用しており、その盛方は表面や擾乱穴で観察するかぎり、多くは地山ブロックと黒色土が混ざった不均一な土層をしめす。地山ブロックには喜界アカホヤからATまで含まれている。

墳端部とクビレ部

墳端は近代以降の畠地耕作で掘削されており、少なくとも幅1m以上が掘削され、調査区の中ではまったく確認できない。したがって、後に述べる埋葬施設にいたる墓道の墳端における状況はわからない。

1段目のクビレ部はほかの斜面より多く黒色土の堆積があった。大量の円筒埴輪片が転落しており、盾形埴輪も2点検出できたが、クビレ部に樹立したものではなく、テラスや墳頂から転落したものである。埋土から土師器・須恵器は出土せず、この箇所における埋葬に際しての祭祀行為は認められない。クビレ部は現状ではなだらかなカーブを描くが、築造当初はもう少し縮まる予想される。

テラスは全体に擾乱などで明確な変換がみられず、石室開口部では判然としないが、後円部で幅約2m、クビレ部から前方部で幅狭く遺存している。埴輪は後円部から石室開口部までの間に5点の円筒埴輪基底部を確認したが、すべて倒れて樹立状態は判然としない。

石室開口部を中心に両側のテラス上には礫が大量に検出できた。北側の礫に範囲は幅約2m、南側はクビレ部にいたって幅3mに及ぶ。整然とした積み方を行っておらず、一部に熱が加わった痕跡も認められる。大きさは拳大のものから人頭大のものまであり、後に述べる石室開口部両側面にみられる焼土の外側に位置し、なんらかの装飾的な効果を果たしたか、追葬の際に石室入口にあった礫を取り外して並べた可能性もある。

墳頂部

全体に遺存状態が悪く、樹根などの擾乱穴が目立つ。他のトレンチの確認事例から円筒埴輪列が存在していた可能性が高いが、遺存していた円筒埴輪はすべて基底部で2点にすぎない。地元住民によると、戦時に墳頂部で山茶栽培を行っていたらしく、この際の擾乱で多くが失われたと想像される。精査の結果、調査区内の墳頂部では埋葬施設は確認できなかった。

墓道

墳丘測量の際に大小の礫が確認できたので、横穴式石室とそこに進入するための墓道の存在を予想していた。表土を除去する際に最も困難であったのは墳丘に堆積した土層と墓道に堆積した土、および盛土の3種類の土層を見極めることであり、この作業に多くの時間を費やした。

観察の結果、AT層を掘削したであろう淡黄色のブロックを含む黒色土が盛土を構成していく部分的に層をなしていることが判明した。また墓道に堆積した土層にはその上面で焼土を部分的に含み、墳丘全体に堆積した黒色土より若干軟質であった。

墓道に堆積した土層から少なくとも2回以上の埋葬が行われた可能性がある。墓道内の堆積土からは大量の埴輪片が出土したが、土師器は須恵器模倣土師器片が少量あつただけで、須恵器は1点も検出できなかった。

墓道を構成する盛土の下層には、サブトレーナーで確認の結果、径10~15cm程の礫がほぼ水平に敷かれていることが判明した。この敷石は石室開口部から2mの位置と閉塞部の直下ではほぼ同じ高さに確認できるため、おそらく石室構築前にその位置全面に敷かれたものと推測している。石室の安定や排水のための暗渠を意識した施設ではないだろうか。

敷石の上は盛土と礫を利用して床面や壁面を構成している。特に石室に向かって右側の壁面は礫を2~3段に差し込んで壁面を構成していることが顕著であるが、その積み方には明確な規則性は見出しがたい。墓道床面は部分的に礫が露出しており丁寧な仕上げを行っていない。このような行為が築造当初からのものなのか、追葬行為等により乱されたのかは判然としない。石室開口部にいたる床面は約15度の傾斜で緩やかなスロープになっている。

石室開口部とその閉塞

石室の開口部は両側壁の位置で幅約1.2mを測る。天井石との間に約30cmの黒色土が詰まった空間を残し、すべて大小の礫で閉塞していた。石室床面から天井石までの高さは閉塞石があるために計測できないが、約1.3mと推測できる。閉塞石は長方形や円形の河原石が多く、上面には礫間に埴輪片が見える箇所があるため、追葬などによる積み替えが行われた可能性がある。

両側壁の外側には焼土が検出できた。これらの焼土はテラスで検出された礫群までおよび、2段目の盛土の下層をなしていることから、石室構築の際に盛られた土層であると推測できる。焼土は軟質で盛土を補強するのには不向きと考えられる。

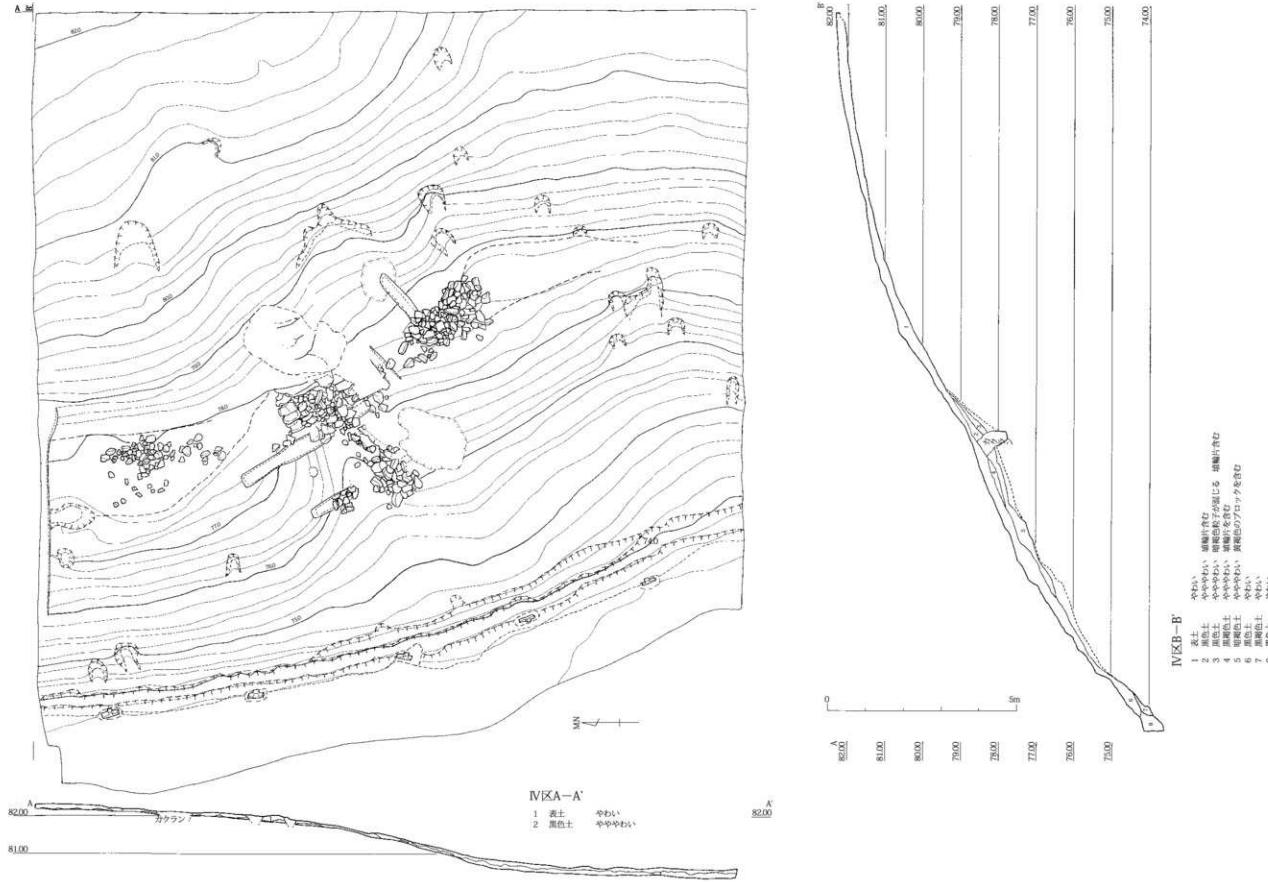
天井石と攪乱穴

天井石の上方には径2.5mの攪乱穴があり、その半分を掘り下げるによって3枚目の天井石までが確認できた。攪乱穴は天井石と側壁の間に径30cm程度の隙間をつくっており、この攪乱が盜掘穴であることを推測させる。

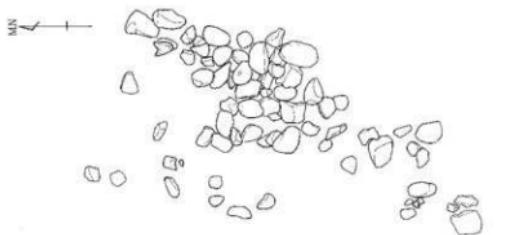
天井石は1枚目が幅1.6m、奥行き1m、厚さ40cmを測る扁平な形状を呈する。2枚目、3枚目の規模は不明だがほぼ同様であると考えられ、すべて材質は砂岩である。

出土遺物

テラスには遺存状態が悪いものの、埴輪列を構成したと思われる円筒埴輪の基底部が見つかっている。墳丘斜面の埋土中には、1段目と2段目ともに埴輪片が多く含まれている。墓道の埋土中からは須恵器模倣土師器の杯部片が検出されている。埋葬行為に伴う可能性もあるが、小片が多い。



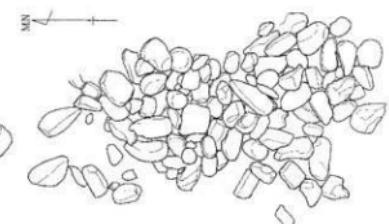
図版40 IV区平面図・断面図



1. 石室 北側の砾群



1. 石室 北側の砾群



2. 石室 南側の砾群



2. 石室 南側の砾群

0 5m

図版42 IV区テラス上に並べられた砾群平面図・見通し図

第5節 調査結果のデータからみた古墳構造の概要

今回の調査によって次のような概要が確認できた。

- ①古墳の規模は2段築成で、墳端の把握が不十分であるが築造時の墳長は82m、後円部の東西径は38.5m、前方部幅は51m、くびれ部は28.5mと復元できる。最高点は後円部で82.3m、前方部では81.7mとなっている。
 - ②2段築成で、テラスが全周する。テラス幅は後円部が広く、前方部は狭い。埴輪列が高密度で並べられ、円筒埴輪だけでなく朝顔や盾形埴輪も並べられたようである。
 - ③埴輪列は後円部、前方部の墳頂にも存在した。ただし、残存状態が悪く、どの程度の密度で並べられたかは不明である。
 - ④くびれ部は緩やかなカーブを描く形状で、前方部と後円部との境が不明瞭である。
 - ⑤盾形の周溝と周堤が巡る。周溝は東側の幅が広くなってしまっており、左右対称ではない。周堤の外側には部分的に外周溝が巡り、これにより周堤幅は5～6mとなる。外周溝が全周するかどうかは判然としない。
 - ⑥西側周堤には形象埴輪群が樹立されていたが、すべて転落し原位置を留めていない。形象埴輪は総数60個体を数える。
 - ⑦後円部西側で横穴式石室を検出した。石室は墳丘の中腹に位置し、南西方向に開口している。少なくとも2回以上の埋葬行為があったことを確認した。石室内部の調査は行っていない。
- 以上概略を述べたが、詳細については次年度発行予定の「遺物編・考察編」で記述する予定である。



1. I区（東から）



2. I区（62号墳を中心）

写真図版 2



1. I 区 63号 墳周
溝



2. I 区 63号 墳周
溝西壁土層堆積状
況



3. I 区
62号 墳周溝



1. II・III区全景（上空から）



2. II・III区全景（南西から）

写真図版 4



1. II・III区 周堤完掘（南から）



2. II区 石室へと至る土橋



1. II・III区調査状況（西から）



2. II区
周堤への立ち上がり



3. II区 周堤から周溝へ転落した遺物出土状況



4. III区 壁端付近の遺物出土状況

写真図版 6



1. III区 遺物検出状況（南西から）



2. III区で検出した前方部隅角の墳端



1. III区 周溝内の遺物出土状況



2. III区 周溝内に転落した形象埴輪
(墳丘側から撮影)



3. III区 周溝内に転落した形象埴輪
(周堤側から撮影)



4. III区 周堤外方に転落した形象埴輪



5. III区 周堤外方に転落した柵形埴輪



6. III区 周堤の外側を巡る外周溝

写真図版 8



1. IV区 横穴式石室検出（西から）



2. IV区 横穴式石室検出（真上から）



1. IV区 横穴式石室検出（真横から）



2. IV区 横穴式石室（墓道から）



3. IV区 横穴式石室（北西から）



4. IV区 横穴式石室と天井石



5. IV区 横穴式石室入口と天井石

写真図版10



1. IV区 横穴式石室と天井石（北西から）



2. IV区 墓道の状況



3. IV区 横穴式石室入口付近の土層断面



4. IV区 天井石と攢乱穴



5. IV区 テラスの円筒埴輪列の状況



6. IV区 填端付近の遺物出土状況



7. IV区 填頂（前方部から撮影）



1. 1トレンチ
(北西から)



2. 1トレンチ
テラスの土層堆積状況

写真図版12



1. 1トレンチ
テラス出土の円筒
埴輪



2. 2トレンチ
(西から)



3. 2トレンチ
(南西から)



1.4トレンチ（北から）

写真図版14



1. 4トレンチ
周溝の東側壁面土
層堆積状況



2. 4トレンチ
(填丘側から撮影)



3. 4トレンチ
テラス上で検出した円筒埴輪列



1. 5 トレンチ(左)
と 6 トレンチ(右)
(墳丘から撮影)



2. 5 トレンチ
(周堤から撮影)



3. 5 トレンチ
(周溝から撮影)

写真図版16



1. 6トレンチ
(周溝から撮影)



2. 6トレンチ
(周堤から撮影)



3. 6トレンチ
周溝部分の南側土
層断面



1. 7トレンチ調査状況



2. 7トレンチ北壁土層断面



3. 7トレンチ（周溝内から撮影）



2. 7トレンチ（斜め上から撮影）



5. 7トレンチ周溝内の遺物出土状況

写真図版18



1. 8トレンチ周堤の状況（東側から）



2. 8トレンチ 周溝内遺物出土状況

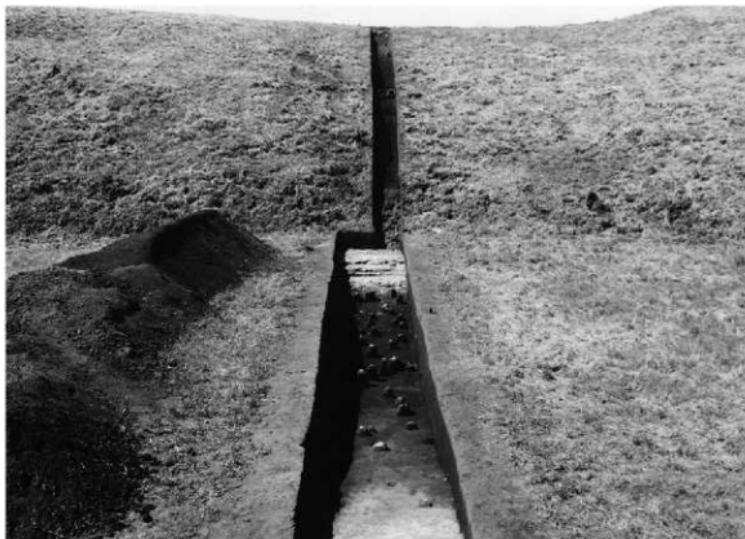


2. 8トレンチ 周堤への立ち上がり



1. 9 トレンチ 墳頂から周溝・周堤を見下ろす

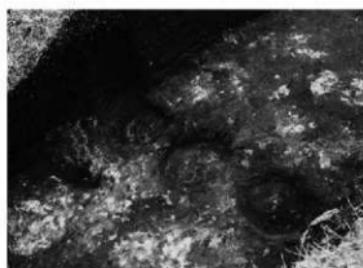
写真図版20



1. 9トレンチ 周溝および墳丘



2. 9トレンチ テラス上の円筒埴輪列



3. 9トレンチ テラス上の円筒埴輪列
設置のための塙方



4. 9トレンチ 墳頂出土の円筒埴輪



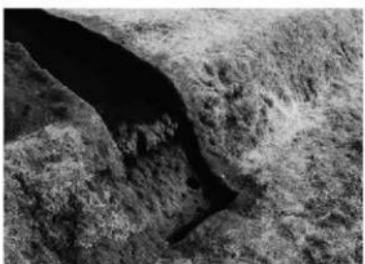
5. 9トレンチ 周溝内の遺物出土状況



1. 10トレンチ 墳丘と周溝



2. 10トレンチ 周溝の状況（東側から）



3. 10トレンチ周溝から周堤への立ち上がり



4. 10トレンチ 周溝内遺物出土状況



5. 10トレンチ 周溝から墳丘への立ち上がり



6. 10トレンチ 北壁周溝埋土堆積状況

写真図版22



1. 11トレンチ（南から）



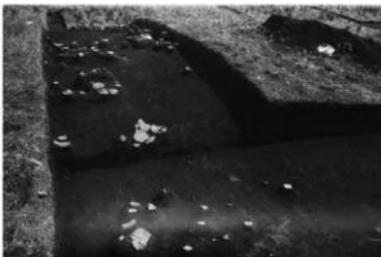
2. 13トレンチ（南から）



2. 13トレンチ東壁土層断面



1. 12トレンチ周溝と前方部斜面



2. 12トレンチ填頂付近の遺物出土状況



3. 12トレンチ周溝内遺物出土状況



4. 12トレンチ 周溝と填端

写真図版24



1. 14トレンチ 周溝隅角



2. 14トレンチ 円筒埴輪出土状況



3. 14トレンチ 周溝隅角と円筒埴輪



4. 14トレンチ (南から)



1. 15トレンチ（南西から）



2. 15トレンチ（南から）



3. 15トレンチ検出の土坑半裁



4. 15トレンチ 周溝の南東隅角検出



5. 15トレンチ 周堤外方の遺物出土状況

写真図版26



1. 16トレンチ
(北西から)



2. 16トレンチ
外周溝



1. 17トレンチ（西から）



2. 17トレンチ クロボク層が掘削された状況

写真図版28



1. 18トレンチ
(東から)



2. 18トレンチ
南東壁土層断面



3. 18トレンチ
周溝内遺物出土状
況



1. 19トレンチ
(南東から)



2. 19トレンチ
周溝完掘

写真図版30



1. 27トレンチ周溝検出状況



2. 27トレンチ2重目周溝土層断面

3. 27トレンチ（東から）



4. 26トレンチ（南東から）



5. 26トレンチ周溝埋土の状況



6. 26トレンチ
2重目周溝の終結部分



1. 30トレンチ



2. 30トレンチ
63号填塡端の状況



3. 29トレンチ63
号填塡丘斜面の状況

写真図版32



1. 28トレンチ
(西から)



2. 28トレンチ
63号墳墻端とテ
ラス



3. 28トレンチ
63号墳テラスの
状況



1. 20トレンチ
62号墳周溝と
埴丘（南東から）



2. 20トレンチ
62号墳周溝内遺
物出土状況

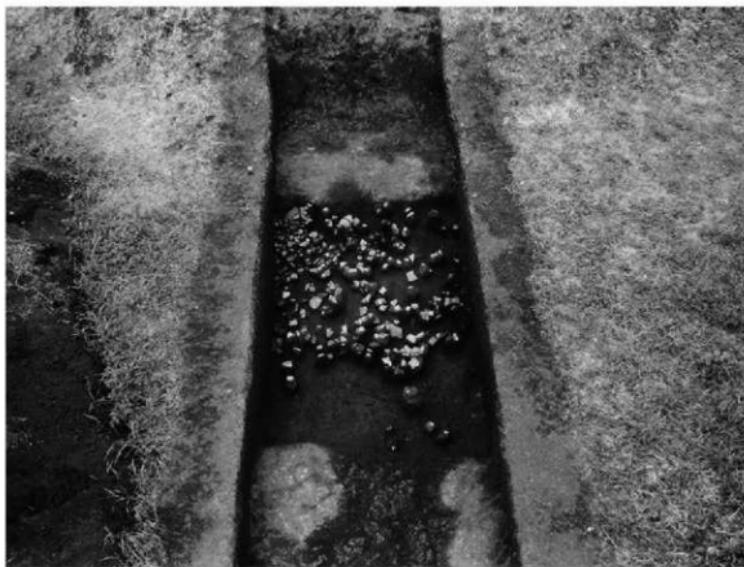


3. 20トレンチ
62号墳西壁周溝
土層断面

写真図版34



1. 21トレンチ 62号墳周溝と墳丘（西から）



2. 21トレンチ 62号墳周溝内遺物出土状況



1. 21トレンチ 62号墳周溝



2. 24トレンチ 62号墳周溝



3. 25トレンチ 62号墳周溝



4. 62号墳周溝内出土形象埴輪



5. 62号墳周溝内遺物出土状況



1. 62号墳周溝内遺物出土状況① (墳丘から撮影)



1. 62号墳周溝内遺物出土状況② (墳丘から撮影・拡大)



1. 209号墳 北側周溝検出状況



2. 209号墳 北側周溝内遺物出土状況



3. 209号墳 西側周溝検出状況



4. 209号墳 西側周溝内遺物出土状況



5. 209号墳（百足塚から撮影）

写真図版38



1. 209号墳
(北側から)



2. 209号墳
西側周溝



3. 209号墳
東側周溝

報告書抄録

ふりがな	しけきにゅうたばるこふんぐん むかでづかこふん (にゅうたばるごじゅうはちごうふん)
書名	史跡新田原古墳群 百足塚古墳（新田原58号墳）
副書名	国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査報告書
卷次	1
シリーズ名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第67集
編著者名	樋渡将太郎
編集機関	新富町教育委員会
所在地	〒889-1403 宮崎県兒湯郡新富町大字上富田7491番地 TEL.0983-33-1022（直通）
発行年月日	2014年1月31日

ふりがな 所収遺跡・地区名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むかでづかこふん (にゅうたばるごじゅうはちごうふん) 百足塚古墳（新田原58号墳） にゅうたばるろくじゅうにゅうとうふん 新田原62号墳 にゅうたばるろくじゅうさんごうふん 新田原63号墳 にゅうたばるにゅうくきゅうごうふん 新田原209号墳	みやざきけんこ ゆぐんしんとみ ちようおおあぎ にったあぎひが しました 宮崎県兒湯 郡新富町大 字新田字東 俣	47	1001	131° 25' 39"	32° 6' 9"	19970931 ～ 20120331	3000m ²	史跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物
百足塚古墳 (新田原58号墳)	古墳	古墳時代	横穴式石室 周溝 周堤 円筒埴輪列 テラス			形象埴輪 円筒埴輪 須恵器 土師器
新田原62号墳	古墳	古墳時代	周溝			形象埴輪 円筒埴輪 須恵器 土師器
新田原63号墳	古墳	古墳時代	周溝 二重目周溝 テラス			須恵器 土師器
新田原209号墳	古墳	古墳時代	周溝			須恵器 土師器

概要	百足塚古墳は推定墳長82m、2段築成前方後円墳。今回の調査で大規模な形象埴輪群や横穴式石室の開口部を確認した。形象埴輪は人物、動物、家、櫛などで主に西側周堤上に並べられ総数60個体を数える。また、墳丘のテラスや墳頂には円筒埴輪が高密度で並べられていた。横穴式石室は開口部のみの調査だが、県内最古の可能性が高い。
	62、63、209号墳はいずれも円墳でその位置関係から百足塚古墳に従属的な陪塚の可能性が高い。62号墳からは百足塚古墳と同規格の円筒埴輪が出土。63号は埴輪の樹立は確認されていないが、2段築成であることや、一部に二重目の周溝が巡ることを確認した。209号墳は墳丘が消滅し周溝のみが残存している状態だったが、周溝内からは60個体に及ぶ須恵器を検出した。

新富町文化財調査報告書 第67集

**百足塚古墳（新田原58号墳）
新田原62・63・209号墳
遺構編**

発行年月日 2014年1月
発 行 宮崎県新富町教育委員会
印 刷 (株)宮崎南印刷